

この堅実クルセイダー
に決断を。

ぶたはこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゆんゆんの族長試練が終わった後の紅魔の里。そこで流れるハタ迷惑な噂と巻き込まれたダスト達。パーティーの珍道中。

この作品は「この素晴らしい世界に祝福を！」及び「あの愚か者にも脚光を！」の二次小説です。

原作小説での14巻以降を想定していますのでネタバレにはご注意ください。

独自の解釈、設定、オリジナルキャラが登場しますので。

それらが苦手な方はご注意ください。

1
2 話

1
1 話

1
0 話

9
話

8
話

7
話

6
話

5
話

4
話

3
話

2
話

1
話

109

102

94

90

84

72

57

41

27

20

9

1

目次

1
4 話

1
3 話

118

115

1 話

「お前ら、暇だよな」

急にギルドに入ってきて来るや、俺達が座るテーブルに寄って来たダストが開口一番そんなことを言ってきた。

「…暇も何も、お前が居なかったから暇してたんだよ」

「勝手にクエスト決めたら怒るくせして、クエスト行く日は集合時間言ってるでしょ？
なんでただの一回も守らないかなあ」

キースもリーンも辛らつな物言いだが仕方ない。事実、今日はクエストに行く予定だったのにも関わらずダストは大幅に遅刻してきたのだから。

「とりあえず遅刻の理由があれば言ってみろ、今の発言の答えについては内容を聞いてから考えてやる」

「いいよテイラー、話なんて聞かなくても。どうせ遅刻の理由もしようもない事だろうし」

一応話だけは聞いてやるかと思ったが、リーンにたしなめられてしまった。言いたい事は良く分かるし実際そうなのだろうが、そういうことを言うたダストの奴は…。

「んだとリーン。それじゃ俺が、毎回くだんねえ事で遅刻してるみたいな言い方じゃねえか」

「この前の理由は道端で失礼な事した新人に教育してたからだっけ？ダストからの言いがかりで困ってた新人を憲兵さんが助けてたって聞いたけど？」

「反面教師としては役立ってんな。その前は逆ナンにあつてたからとも言ってたけどよ、単に露出多い装備の女冒険者付け回してただけじゃねえか。偶然だけどそれっぽい冒険者が『金髪のチンピラがストーキングしてきた』って話してるの聞いたことあるぞ」

「はあ…」

ため息しか出ない。本当に悪い奴では無いとは分かつてはいるが…最近、何でパーティーを組んでるんだろうつて悩む事が多くなってきた気がする。

「はいはいはい、過去の事に囚われちゃ先に進めないぜ。とにかく話だけでも聞きやがれ、遅刻の理由にもなってるんだ」

「…あのー、やっぱり私から説明した方がいいんじゃない？」

突然の女の子の声に少し驚く、どうやらダストの後ろに居たようで気が付かなかつた。確かこの子は…。

「あら、ゆんゆんじゃない？」

そうだ、ゆんゆんだ。紅魔族の人達は皆変…個性的な名前で覚えやすいように覚えに

くい。しかしこの子も良く分からないな、なんだってダストなんかと一緒に居る事が多いのだろうか？ やや引つ込み思案な所を除けば普通の娘だし。紅魔族のアークウィザートということで、魔法職であるにも関わらずソロが出来る程の手練れだということに。

「そんなところに居ないで早くこつちに座りなよ。ダストの近くは危険だよ？」

「おい、どこがどう危険だったんだよ」

リーンは手招きをしてゆんゆんを席に座らせると。

「これからダストの話聞くにあたって、最悪流れ弾が行くかもしれないでしょ？」

「お前さんだけ俺の事信用してねえんだ？ つーかい加減人に向かって魔法ぶっぱすんのやめろー！」

ギルドの中：いや街中で魔法を放つのは確かにやめて貰いたい事ではあるが、ダストの自業自得でもあるしなあ。

それに：それ以上に迷惑な魔法を毎日のように撃っている奴が居るせいで『リーンの使う中級魔法くらいなら：』と、この街の住人は感覚がマヒして来ているくらいがある。「このままじゃラチが明かないな。ゆんゆん、すまないが説明を頼む」

悲しい事にダストが言ったところで信憑性に欠ける。彼女も当事者のようだし任せた方が無難だろう。

「は、はい！では…私とダストさんが結婚するという話になりました…」

「結婚?!」

本気かこの子は！確かに一緒に居る所をよく見るとは思っただけが…まさかそこまでの仲に発展していたなんて。

「ちよつとダストどういふこと!?!さっきの暇があるかってもしかして結婚式なの!?!」

「この子お前の守備範囲外だろ!?!遂にロリに手を出すのか!?!」

「ちよつと待て、まずは一回ゆんゆんを殴らせろ」

「えええつ!?!」

ダストが本気目の目をしてゆんゆんに向かって一歩踏み出す。

しかしそれはリーンとキースによって遮られ、二人はダストに向かって大声で質問を投げかけていた。…まずいな、大声で結婚だのと騒いだせいで周りの注目を集めてしまっている。

「結婚?誰が?」

「ダストが…だと?相手はどこ物好きだよ!」

「どうやらいつもギルドに一人でいるあの女の子みたいだぜ」

「あの子ってよくダストと一緒に居るよな?まさか…」

「でもいつもいじめられてるといふか、たかられてなかったか?」

「うわっ！サイテー！やっぱりお金目当てなんじゃない！」

「あんな可愛い子がダストに……マジ鬼畜だな」

普段の行いが行いなだけに周りの感想も酷いものだった。

「……………」

リーンやキースはまだダストに食ってかかっているが俺は一周回って冷静になっていた。よくよく考えてみればダストがそんな事をするはずが無い、もしするにしてもあんな切り出し方はしないだろう。仕方ない、まずはこの場を収めなければ話も進まん。

俺は立ち上がって大きく息を吸い込むと。

「皆冷静になつてくれ！ダストのようなクズが結婚なんて……いや恋人が出来たりするはずが無いだろう！この中にダストに好きだったり尊敬している奴が一人でも居るか？
答えは決まっている！居る訳が無い！」

ギルドの隅々に届くほどの俺の大声に喧騒がピタリと収まった。

そしてぽつりぽつりと「確かに」や「そうだな」といった納得の聲が上がる。良かった、とりあえず事態は收拾したようだ。

「さあ、話の続きをしよう。今度は冷静に聞いてやるぞ」

「うん。テイラー、お前も殴らせろ」

ダストも余裕が出たようで何よりだ。

その物騒な提案は無視をして、まずはゆんゆんの説明を聞くとしよう——。

「——はあー…そういうことね、結局元凶はカズマンじゃない」

「まったく、はた迷惑な」

「分かったら？俺だつて被害者だつてことにな。あとゆんゆん、話が分かり辛え。お前本当に学校なんて通つてたのか？ギルドの隅っこで一人遊びしてる暇あつたらこの街ので良いから行ってこい」

「ひ、酷い！なんでダストさんにそこまで言われなはいけないんですか!？」

…可哀想ではあるが、正直ダストに賛同したい。どうにもこの子は話下手な所があるようで、先の騒動のように急に話が飛んだりすることが多かったのだ。しかも、そんな話し方をすれば聞いている側が振り回される事に気がついていない。この子のためにも、誰かが矯正してあげないと今後また大変な事になるだろう。

「精神年齢近そうなガキ共がたくさん居るから友達作るのには困まんねーぞ。そこで一緒に勉強してまともな話し方を身につけてこい」

「ちよつとダスト、言い過ぎじゃないの？それを言うならあんたは道徳つてもんを身につけてきた方がいいわよ」

「…友達。私ぐらいの歳でもそういう所についてもいいのかなあ？」

「あれ？なんで乗り気なんだこの子？」

引つ込み思案かと思えば、妙な所でポジティブな所もあるんだな。それなりにダストと付き合えている度量の深さも持ち合わせて居るし、まだまだ底が見えない人物だ。

「んなことはさておき、俺がお前らを誘った訳が分かったら？頼むから一緒に来て説明を手伝ってくれ。俺一人じゃさらに面倒な事態に発展しそうで怖えんだよ」

ダストが仕切りなおした所で本題である。ゆんゆんの説明をかいつまんで整理すると：まず結婚がどうのこうのという話、これは完全に誤解だった。話は彼女の故郷、紅魔族の集落でもある紅魔の里の族長を決める試練に彼女が挑戦する事から始まる。

その試練は二人一組で受けるもので、まあ：あまり知り合いが居ないゆんゆんは唯一気軽に頼める相手ということで同じ紅魔族のめぐみんとその仲間であるカズマ達に協力を要請、試練自体は何とか達成出来たのだという。しかしその短い滞在の間に、カズマが彼女の友達の子に対してゆんゆんのアクセルでの近況を話した事が騒ぎの元だった。

『次期族長となったのにも関わらず、ゆんゆんはアクセルに戻るらしいぞ。』

『ゆんゆんのアクセルでの知り合いが言うには、何人か男の知り合いが居るらしい。』

『魔王を討伐して成果を上げると言っていたが、もしかして男と離れるのが嫌だったからじゃ？』

等々、どんどんと尾ひれが付いていつて取り返しのつかない状態になってしまったよ

うである。

「確かにねー娘が結婚相手として連れてきたのがダストでしょ？勢い余って殺されたりしないかな？」

「俺だつたらまず娘をぶつたたいて目を覚まさせるな」

「親子の縁を切られても不思議ではないだろう」

「えーと…その中ではリーンさんの予想が一番近いかも知れせんね」

「頼む、マジで助けてくれ！俺もうクーロンズヒュドラんとき一回死んでんだぜ？ゆんゆんに親父に殺されたらもう復活できねえよ！」

まあ、ここで見捨てるぐらいならパーティーなんて組んじやいない。説明のためについていくくらいなら良いだろう、これはリーンにキースも同じなはずだ。

「わかった。正直ダストの事はどうでもいいがゆんゆんに迷惑がかかるのも悪い。それに魔王軍とも互角以上に渡り合える紅魔族の里、一度見に行くのも面白そうだ」

「うんうん。ダストの事はさておき、誤解されたままじゃゆんゆんが可哀想だからね」

「俺もいいぜ、一部の情報じゃ紅魔族の女の子って美人が多いらしいじゃねーか。噂を確かめるいい機会だ」

「ありがとうございます！」

「ありがとうよクソ共。この借りは絶対返してやるから覚えて置きやがれ」

2 話

そうして全員の利害が一致し紅魔の里行きが決定した。善は急げと言うし、今日のクエストは取り止めて紅魔の里に向けて準備や計画を立てないとな。

とりあえずギルドの外に出て、必要な物資や馬車の手配の為に手分けしようと思ったところだ。

「つーかどうやって行くんだ？紅魔の里って確かアルカンレティアのもつと先だったよな？馬車とかで何日もかかるってのも大変だけどよ、何よりあの街を経由しないといかないってのが勘弁してもらいたいところなんだけど」

心底うんざりしたような表情で語るキースの言葉に、俺達はうんうんと頷いて同意する。そうだった：キースの言う通り、紅魔の里へ行くにはあの街を経由しなければ難しいハズだ。

俺達は以前アルカンレティアに旅行に行ったことがあるのだが：悪名高いアクシズ教徒の総本山でもあるあの街で、まさに悪夢とも言える勧誘地獄を体験しているのだ。よほどの理由が無い限り、あの街へは近づきたく無いのは全員が思うところだろう。

「あ、私がレポートで送るので大丈夫ですよ」

「マジかよありがてえ！あの街に行くくらいならダストは見捨てる気でいたけどこれで安心だな。しかも自前でレポート出来るとか便利だよなあ、リーンはとらねえのか？」

「は？」

明らかに不機嫌さを表すリーンの声に一瞬場が凍り付く。

「キース。あんた、今何言ったか分かってるの？」

「え？……いや……」

リーンの剣幕にキースは怖気ついている。気持ちには凄く分かるぞ。紅一点だとかそういうのは関係無く、リーンはキレると一番怖いのだ。

「あたしくらいのウィザードがレポートなんて超高コストの魔法覚えられるはずが無いでしょ！誰でもホイホイ覚えて使えたら転送屋なんて商売成り立ってないわよ！消費魔力もハンパじゃないし：普通の魔法職が使ったら一発で魔力切れに陥るんだから！」

「そ、そうなんだ……」

リーンは興奮冷めやらぬ様子でキースを睨みつけている。

普段はこんなになる事はないのだが、リーンのウィザードとしての矜持から無視する事は出来なかったのだろう。無神経にそんな事を言ったキースが悪いと言えば悪いの

だが、他の職業の事情なんて普通は分からないものだ。

単に間が悪かったと言いたい所だが、キースは割とそんなやらかしが多い気がするな。ところで矛先が自分じゃないのにダストは何であんなに怯えた顔をしてるのだろう。基本リーンに怒られてるのはダストなので条件反射にでもなってるんだろうか？

「す、すみません！私、そんな事情全然知らなくて…」

「あ…ゆんゆんは気にしなくていいってば、無神経なキースが悪いだけなんだし。けどテレポートに関しては周りに気を付けて話した方がいいよ。さっき言ったみたいに転送屋っていう商売がある以上、善意でも手を貸しちゃうと営業妨害って思われる可能性があるからね」

リーンの忠告をゆんゆんは素直に頷いて聞いている。

話を聞いたたり実際会ったりして、彼女が頼み事とかを断れなさそうな性格してるとうのは良く分かる。普段からピンチになった冒険者を助けて回っていたりしている様だし、この忠告は確かに必要だろう。

「こ、今回はゆんゆん自身の事情で帰るんだし特例って事にしてだな。とりあえず行くぜ？」

リーンの剣幕に今だ怯えるキースを慮ってか、ダストが話題を変えるように声を上げる。ナイスだダスト、流石に慣れてるな。

「そうだな、善は急げという事だし。こうしている間にもいらぬ噂が広まっているかもしれない」

「あー…なんかごめんね、つい熱くなっちゃって」

「いえいえ、気にしないでください。では皆さん、テレポートをするので近くに…あ！」
突然ゆんゆんが声を上げる。

「す、すみません！ちよつとだけ！ちよつとだけ待っていてください！『テレポート』」
俺達の返事を待たずにゆんゆんはテレポートで何処かに飛んでしまった。取り残された俺達は何がなにとやらと固まるだけで、誰も言葉も発せない。

「お待たせしました！」

「うおっ!？」

「きやつ!？」

ゆんゆんは一分もしないうちにその場に戻ってきた。

急に現れたものだからダストとリーンは声を上げて驚き、俺は声こそ上げなかったが体はビクリと反応する。キースは何も反応しなかったが…まださっきのを引きずつてたようだな、怯えた目でリーンを見つめている。

「何処に何しにいったんだ？」

「え、えーと…気にしないでください！では改めまして『テレポート』」

ゆんゆんの魔法の発動と共に一瞬視界が真っ暗になる。

そして次に目の前に現れたのは先ほどまでのアクセルの市街ではなく、一軒家がポツリポツリと立ち並ぶ山奥の村の情景だった。

「テレポトなんてそうそう使える移動手段じゃ無いから久々だが、やはり一瞬で移動するとう感覚に慣れないな」

「…そうよね。普通はそんなに使えたりしないわよね」

何故かリーンが落ち込んでる。その視線の先はゆんゆんに向いている様だが…ああ、そうか。ついさつきテレポトの凄さについて語っていたのにも関わらず、何か事情があったにせよゆんゆんは連続で三回も使って見せたのだ。

ゆんゆんは紅魔族だからと思いたいところだが、その心情は察して余る。俺もアクセルの街に王都で有名な勇者が現れ、高難度のクエストをあっさり達成して帰ってきたのを見て多少落ち込んだものだ。遥かな高みに居る者への劣等感というものは中々呑み込めるものではない。

「うお!?なんだあの魔法陣!いかにも大魔法って感じがしてるけど大丈夫なのか?」

キースが大声を上げて指さす方向を見ると、言った通り巨大な魔法陣を前にローブを着た人物が杖を片手に何かをしている真っ最中だった。

「あそこの大金じゃ何作ってんだ?めっちゃくちゃ怪しい瘴気放ってるけど口に入れる物

じゃ無いだろうな?」

「な、なんか竜巻が起こってるけどあれも魔法!?自然現象じゃないわよね?」

「見ろ! あんな巨大なゴーレム見た事ないぞ! 紅魔族はあんなものも使役出来たりするのか…」

ただの山奥の村ではあり得ない、村の各所で行われている魔法の数々に俺達は驚く事しか出来なかった。キースなんてリーンへの怯えを忘れるくらいだ。

俺達をはじめとする、アクセルの街の住人たちが知っている紅魔族の二人とは明らかに違う。なるほど。こうして日々魔法と向き合って過ごし、魔王軍との戦いに常に備えているのが紅魔族本来の姿なのか。

「み、皆さんが驚いてくれたようだなによりです…。あんまり見えていて邪魔になっちゃうのも悪いので、とりあえず宿屋兼酒場のお店にでも行きませんか?そこは私の友達の家でもありました…」

騒いでいる俺達に対し遠慮がちに、何故かゆんゆんが顔を真っ赤にしながら提案してきた。ちよつと目を離れた隙に何かあったのだろうか?

しかし邪魔をしてはいけないというのはその通りだ。それに色々話をするのに武器等は邪魔になるだろうし、まずはそこで荷物を預かって貰うとしよう。

「やつほーゆんゆん、約束通り結婚相手を連れてきたんだね」

「男の人は三人居るけど…金髪の人はこの人でしょ？仮面の人は連れて来なかったの？」

宿に向かおうとした所で二人の紅魔族の女の子に声を掛けられた。二人共ゆんゆんと同年代くらいで、一人はポニーテール、もう一人はツインテールの髪型が特徴的だ。

「違うから！結婚相手とかじゃないから！連れてきたのは一緒にそういうのじゃ無いって説明して貰うための…」。ふにふらさんどどんこさん…お願いだから皆の誤解を解くのを手伝ってくれませんか？」

「まあぶっちゃけそうだろうとは思ってたんだけどね。あのゆんゆんがいきなり結婚なんて私達は信じて無かったよ！多分話を信じてるのって、ゆんゆんの親族とおじさんおばさん世代より上の人ぐらいじゃない？」

「族長の娘って事で可愛がられてたもんねー。でも協力するのはやぶさかではないよ…そのかわり」

珍妙な名前が判明した女の子達はゆんゆんを手招きするとコソコソと相談を始めた。

ゆんゆんが驚いたり嫌そうだったりとリアクションを取ってくれたので、あまり愉快な内容じゃない事は分かる。なんかチラチラとこつちを見てきてるし、嫌な予感が外れてくれるといいのだが…。

「え、えーとキースさんとテイラーさん。もし良ければこちらの二人と紅魔の里の観光

なんてどうでしょうか？」

「え？」

「ほ、ほら！先程紅魔族の事を知りたいって言っていましたし、お父さんへの説明はダストさんの他にリーンさんが居るならばきつと大丈夫だと思っんですよ。それならただ待つているよりはいいかなー…」と

：ゆんゆん嘘が隠せない娘だというのも分かった。なんとなくあの二人に頼まれた内容も把握できるというものだ。あの二人も、もうチラチラどころじゃないほどこちらを見てきているし。

「おいおい、俺達は遊びに来てるんじゃないぞ。百歩譲って観光に行くにしてもなんで俺をハブにしよう。もうゆんゆんとリーンだけで説明行つて来いよ、俺もこいつらと観光してっからよ」

「いやいやいや！ダストは当事者として説明に行つた方が絶対良いつて！勿論俺は観光に行かせてもらうぜ。多分ゆんゆんと同年代だろうから少し若いかなーつてとこだけだよ、こんな可愛い子に案内してもらえるなら断る理由なんて無いつてーの」

「えーそんなー可愛いだなんて」

「お兄さんも中々カッコいいと思いますよー」

キースはさつさと二人に近寄つて自己紹介を始めている。ダストは移動しようとし

たところでリーンに耳を引つ張られて止められていた。正直なところ俺も観光側に行つても良いのだが……。

「俺は遠慮しておこう。キース、荷物になるようなものがあれば預かるぞ」

「え？お、俺一人で行つちやつていいのか？」

「ああ、後は任せて楽しんでこい」

キースは俺の手を両手で握りしめると。

「……テイラー！ありがとう！」

目を輝かせて礼を言つてきた。キースにここまで感謝されるのは初めてかもしれない。

「じゃーあとでなー！ふにふらちゃんにどどんこちゃん、案内宜しくね。とりあえずそうだな……例えば、カップルで観光に来たならここがオススメっていう所とか……あつたりするかな？いやー！今んとこ俺に恋人は居ないんだけどさ！いつか来た時の参考についてうかかね！」

「えー本当に彼女居ないんですかー？……それじゃあ魔神の丘なんてどうです？」

「景色も綺麗だし……きつと気に入ってくれると思うわよ！もし私が誘われちゃつたら『ドキッ』つて、きちやうような場所なんです！」

キース達が楽しそうに話しながら遠ざかつて行くのを見ながら、今預かった荷物を担

ぎなおしていると。

「おい、どういう風の吹き回しだよ？キースなんか花持たせるなんて」

ダストがいぶかしげな表情で睨みながら聞いてきた。リーンとゆんゆんも同じ意見なんだろう、俺の方を見て答えを待っているようだ。

「なに、最近キースの奴は酒を飲むたびに『ダストでさえモテてるのになんで俺だけ…』なんて愚痴る事が多くてな。付き合わされる俺もそろそろ勘弁して貰いたかったんだ。幸い彼女たちもキースに興味を持ってくれたようだし、上手くいったら上手くいったで祝福してやればいい。それに…」

俺は彼女達から謎の相談を受けていたゆんゆんを見つめながら。

「ゆんゆんの反応的に少し嫌な予感がしたからな。もしかしてだが、彼女たちはいつもあんな感じで男に…その、飢えているんじゃないのか？」

「……………」

俺の指摘にゆんゆんは笑顔のまま固まる事で答えてくれた。紅魔の里の恋愛事情は良く分からないが、俺の勘では関わらない方が良いと感じている。ついでの事だが、彼女達は年齢的にも性格的にも俺の好みじゃ無かったのだ。

「はー、私の知らない所でテイラーも苦労してんのね。でもダストがモテてるって何処情報よ？こんなクズに寄ってくる女の子なんて居たかな？」

「…もしかして私も含まれちゃってたりしますか？ご飯とかたかられたりしてただけで、本当は極力関わり合いたく無いって思ってるんですけど」

「あとはあのロリーサとかいう娘のそうじゃないか？あんな小さい子と何処で知り合ったのやら…最初見た時は遂にやってしまったかと心配したぞ」

「…色々だよ色々、俺の事はもういいだろ。もうさつさとゆんゆんの親父のとこいって帰ろうぜ」

こいつも一筋縄ではいかない事ばかりしているな、実際に様々な事情があるのだろうけども。

だが本当に悪い事をしている訳では無いというのは知っているさ。例えキースの勘違いだとしても、最近ダストの周りによく見る相手が増えたのは事実なのだ。その相手が口ではどう言おうとも付き合い続けるのには理由がある。

一応パーティーのリーダーとして扱われている身としては、これでダストの行動が多少でもまともになってくれるきっかけにでもなればと願うだけだ。

3話

「いらつしやい。おや、ゆんゆんじやないか?…その金髪の男は!」

「違います。結婚相手とかじゃないです。その誤解を解くために連れてきました」

本当に昼間から入って良いのかと心配するほどの外観と名前を持つ酒場『サキユバス・ランジェリー』。その扉を開けてすぐ、その主人らしき人物とゆんゆんの一瞬の会話だ。…本当に里全体に広まってしまってるんだな。

「そうなのかい?折角次期族長になったんだからいい機会だと思っただがなあ。おい、ゆんゆんが来てるぞー」

「はーい」

主人が店の中に声を掛けると、元気な女の子の声が返ってきた。その声の主は入り口付近までやって来て俺達を一瞥すると。

「我が名はねりまき、紅魔族一の酒場の娘!いずれこの店の女将になる者!その人がカズマさんの言っていた金髪の人だね!もう一人の仮面の人はどうしたのさ!?!こうして連れてきたって事は親父さんにも報告するつもりなんだよね?いやーあのゆんゆんが同級生では一番初めに結婚するだなんて信じらんないよ。披露宴の料理は私も作ると

思うからさ、すんごい御馳走用意してあげるね！」

めぐみんやゆんゆん、先ほどの二人とも違う実に賑やかな感じの女の子だな。

あまりの勢いに俺達は何も返せずにしたが、ゆんゆんはその女の子に詰め寄ると。

「だから違うって言ってるでしょー！最初にカズマさんから話を聞いたねりまきさんがそんなんだから、噂が一気に広まったんじゃない！」

「えー…でもカズマは否定しなかつたし」

ねりまきと呼ばれた女の子は不満そうに口を尖らせている。

なるほど、彼女こそ今回の騒ぎの大元の片割れなのか。話好きそうな雰囲気に加え場所が酒場だからな、さぞかし噂は拡散した事だろう。というか…さつきいきなり叫んだ紅魔族一がどうのこうのというのは、確かカズマのところのめぐみんが同じような事と言っていた気がするな。紅魔族では流行っているんだらうか？現に店の主人が「しまった…タイミングを逃した」などと呟いている。

「てめえが元凶かこの野郎。つーかさつきの奴らも言ってたけど仮面の人つてバニルの旦那の事か？あの人が事情話したところで来てくれるとは思わねえけど…ゆんゆん、一応声は掛けたんだよな？」

「はい…あつさり断られましたけどね。ただバニルさんが言うには、ダストさんとそのパーティーの人達を連れて行くのが問題解決には近道だと教えてくれたので」

「ちっ！例の力を使いやがったな。何が私利私欲に使わないだ、しつかり面倒事回避に使ってるじゃねえか」

バニルというのは以前アクセルの街の近くで騒動を起こした魔王軍の元幹部の事で、一度カズマ達のパーティーに討伐されている。しかし、残機が一つ減ったという理由で復活したというふざけた存在だ。

復活した後は魔王軍に加担する事も無く、アルバイトに勤しんだりギルドで相談屋をやったりしてアクセルの街で過ごしている。ちなみに彼も最近ダストと一緒に居る所を見かける人物の一人だ。

ちなみに以前一緒にアルカンレティアまで旅行にも行ったこともある。あまり話さなかったから分からないが、なんか温泉とか慰安とかの目的じゃなかったようだ。あんな街に温泉以外の目的でついてくるなんて元魔王軍という事を差し引いても物好きな人物だ。

「カズマが適当な事言いふらしたのも悪いけど、そんな二人と付き合いを続けてたゆんゆんにも責任あるような気がしてきたなあ…。前に友達がどうか言ってたけど、相手は選んだ方が良いと思うよ?」

「…リーン、それは結構なブーメラン発言だぞ」

俺達もよく言われるからな『ダストはパーティーから外した方がいいんじゃないか

？』つて。

「とにかく、私達は一番の問題のお父さんの誤解を解いてくるから。ねりまきさんはここに来た人の誤解を解いて置いてくださいね」

「はいはい。その大きなお兄さんはやけに荷物が多いけど今日は泊つていくの？それなら部屋まで案内するけど？」

「そうだな、折角来たのだし観光もしていこうと思つている。とりあえず荷物を置かせて貰つていいか？」

「観光かー、ウチの里は結構見どころあると思うよ。じゃあ宿になつてるのは二階ね、一階に行こうか？」

普通ならばお客相手にするような態度ではないのだが、不思議と不快感は感じない。

彼女がまどつていゝる空気というものだろうか？失礼というより人懐っこいという印象の方が強く感じられるのだ。

「あ、テイラー。あたしとダストの荷物も頼んでいいかな？その後はここで休むなり観光するなりしていいからさ」

「え？」

階段を上がるといゝところでもリーンに呼び止められた。

どつちにしても荷物は置きに行くのだから持つていくのは良いのだが、休んでいてい

いというのはどういう事だ？

「おいおい、キースだけじゃなくてテイラーも置いてく気かよ？」

「んー邪魔だとかそういう訳じゃ無くってさ、聞いた感じゆんゆんのお父さんが一番大変そうなんでしょ？ 実際関係無くても、あらかじめ知っていた男の他にも違う男が居たりしたら面倒になるんじゃない？」

「あー…」

俺とダストの声が重なる。

確かに、それならいつそリーンだけが付いて行った方が話がこじれなくて良いかもしれない。最悪、俺がバニルと勘違いでもされるといいう可能性もある。

「そうですね…お父さんが暴走したとき、守る人は一人の方が良いですし」

「マジで頼むぞ。というか暴走させない方向で頼む」

「任せときなさいって、それじゃ行ってくるね」

二人の荷物を預かり、三人を見送る。結局俺とキースはただ観光に来ただけになってしまったな。

「ねえねえ、お兄さんはアクセルって街から来たんだよね？」

二階への階段を上がり切ったところで、ねりまきという娘から声を掛けられた。

「あ…ああ。ゆんゆんやカズマ達と同じく、俺達もアクセルを拠点にして冒険者として

活動しているぞ」

「ふんふん…けどさ、ゆんゆん達と知り合いでも紅魔の里は初めてでしょ？良かったらだけど…私が案内してあげよつか？」

「案内か…」

先ほどの娘達の案内は断ったが、実際案内をして貰えるならして貰った方が良いに決まっている。こういった隠れ里的な所では立ち入り禁止の場所があったりする場合があるからな、これ以上余計な問題を起こすのも面倒だし素直に受け入れる方がだろう。

それに…俺が了承するのを期待を込めた眼差しで待っているこの娘の提案を受けないのは、ものすごく罪悪感を掻き立てられる。砕けた調子でも不快感を感じない事といい、本当に良い性格をしているな。

「ではよろしく頼む、見て回る順番はとりあえず任せるよ」

「任せといて！紅魔の里は観光にも力を入れてるから外の人は満足する事間違いない無しだよー」

彼女は親指を立てた拳を突き出しながら満面の笑顔でそう言った。

要するに、この娘はまったく裏表の無い性格をしているのだろう。こういったタイプは今まで周りに居なかつたら新鮮だな。

いや…カズマもある意味そんな感じの性格をしているか？まあ隠そうとしても隠し

きれてないって所が違うけれど、安心して付き合えるという点では似ている気がする。彼女は早速「どこにいかうかなー」などと楽しそうに呟いている。歳は離れているとはいえ女の子と二人きり、正直苦手なシチュエーションではあるがこの分なら楽しく観光出来るかもしれない。

4話

いつの間に許可を取り付けたのか、店の主人（ねりまきの父親でもあった）に見送られて最初に来たのは村の入り口にあるグリフォンの石像だった。

「これ凄いでしょ？グリフォンの石像だよ」

「確かに凄いな、これほどまで精巧に作られた石像なんて見たことが無い。つい先日日本のグリフォンを見かける機会があったのだが、細かい所までしっかり作られているぞ」

ねりまきは俺の感想を聞いて得意げな顔をする。両手を像に向けてポーズを取り。

「ふっふんー！それもそのはず…実は石化魔法で動きを止めた本物のグリフォンなんだよね！」

「なっ!?!と、解けたりしないのか!?!状態異常の魔法というのは術者の魔力や対象の魔法防御に関係すると聞いた事があるが…グリフォンほどのモンスター相手を長時間も止める事ができるなんて…」

「あー、授業でも同じような事言ってたかも？でもこれ私が生まれる前からずっとあるって聞いてるよ？里に迷い込んできたグリフォンが格好良かったから、石化して飾る

うってなつたんだってさ」

何でもない事のようにグリフォン像を見つめるねりまきだが、そもそもグリフォンを石化して飾るという事自体普通は考え付きもしないだろう。ただの観光で終わるとは思つて無かつたが、出ばなからただ事ではない物を見せつけられてしまったな。

「まあ今は単なる待ち合わせ場所だね。他に何か気になる事があつたらなんでも聞いていいよ、テイラー」

ねりまきは振り向きながら笑顔で話しかけてくる。

「ああ、本当に気になる所が多すぎてたくさん質問をさせて貰いそうだよ…ねりまき」
名前を呼ばれて彼女はまた嬉しそうに笑っている。

この呼び捨てについては店を出てからここに来るまでに決まつた事だ。俺がねりまきを一応“さん”付けで呼んだら『なんか背中がゾワツつてくるから呼び捨てでいいよ』と言われ、それに対して俺は『じゃあ俺も呼び捨てで構わない』と返したところ『そう？じゃあよろしくねテイラー』と、歳の差なんて感じさせないほどフレンドリーに、お互いを呼び捨てで呼び合うようになったのだ。

「ん？ん？ん？は…」

ねりまきの先導に付いていくと、先ほど魔法陣を使って大掛かりな儀式をしていた家の前を通りがかつた。

「ここ？これは占い屋だね。今の時間ならやってると思うけど見ていく？」

「占いか、先ほどなんかの儀式のような事をしていたのもそれに関係あるのか？巨大で光を放つ魔法陣があつたハズなんだが」

先ほどそれらがあつた場所には何も残っていない。地面に書くことなく魔力だけで行つていたのですると、それはそれで凄い事である。

「光る魔法陣？…あー！それはね」

ねりまきが何かを言いかけた時：突然占い屋のドアが勢い良く開け放たれたかと思うと、中から前髪を揃えた長い髪の美人の女性が現れた。

「あらいらつしゃい外の人。我が名はそけつと、紅魔族一の占い師！この世の全てを見通す者！ねりまき…ソレを口に出すのは止めておいた方がいいわよ、きつと良くない事が起こるから」

何故か背筋が凍るような気がする笑顔を浮かべるそけつとという占い師。ねりまきはと言うと、さつき何かを言いかけた状態のまま口を開けて固まっております、そのまま息を吸い込んで一回深呼吸をします。

「そうだったそうだった、アレはそういう儀式だったよねー」

明らかな棒読み口調のねりまきである。あんまりにもあからさま過ぎて色々ツツコミたい所ではあるが、ここで余計な事を言うほど俺は馬鹿じゃない。

「分かっけていてくれて嬉しいわ」

そけつとはそけつとで、わざとらしい程に優しくねりまきに笑いかけていた。あの魔法陣については全力でスルーするのが正解のようだな…それはそれとして、ちよつと確認しておきたい事が出来てしまった。

「済まない二人共、答えたくなかったら答えなくてもいいのだが、その…紅魔族一がどうのこうのというのは一体何なんだ？」

「何って言われても…単なる名乗り口上だけど？」

「ええ、紅魔族以外の初対面の相手に対する礼儀みたいなものよ」

気にしていたこっちがおかしく思える程にさらっとした答えが返ってきた。妙に仰々しく言っていたもんだから何かあるかと思っていたのだが…。

「…それだけ？」

俺の呟きに二人は揃って頷くと。

「格好良かったでしょ？」

「格好良かったわよね？」

「……………まあ、割と」

とりあえず、当たり障りの無いコメントしか返せなかった。

さっきのグリフォンといい、なんか紅魔族へのイメージがどんどん崩れてきている気

がするな…いや、そんなのはアクセルの街に住んでいる二人の紅魔族のおかげですでに崩れ始めては居ただけだ。

「さて、店先で立ち話もなんだし中へどうぞ」

そけつとはそう言うときさつきと店の中に入って行ってしまった。

別に占ってもらう気は無かったのだが…まあ、話を聞くだけでもいいか。実際に占ってもらうかは別として一応あれだけの魔力で儀式をしていたのだ、実力は相当な物なだろう。

「ほらほら、早く入ろっ」

「あ、ああ…」

ねりまきに手を引かれて店の中に入る。店の中はまさに占いの店といった感じで、照明は薄暗く所々に薄い布が掛けられていた。

そけつとは中央にある円形のテーブルに椅子を二つ並べ、その対面に回りこんで自分の席に着くと。

「ようこそ占いの館へ…さあ席にどうぞ」

「…どうぞも」

とりあえず促されるまま席に着く。当然、並べられた椅子の隣にはねりまきが座った。

「とりあえず自己紹介をお願いしようかしら？」

そけつと薄く微笑み、少しだけ首をかしげるような仕草で聞いてきた。

その仕草に思わずドキつとする。改めて、彼女がかなりの美人なのだと認識させられた。皆が振り返る程の美人とはまさに彼女の事を言うのかもしれない。

「テイラー。見とれてる所悪いけど、そけつとには彼氏が居るからね」

ついそけつとのことをぼーつと見つめていたら、ねりまきから声を掛けられてハツとする。

「えっ？い、いやそういう訳じゃ無いんだが…すまない、少々失礼だったかな？」

「気にしなくて良いわよ。私自身は分からない事だけど、紅魔の里で一番の美人だつて言われてるくらいだし。男性からのそういう視線には慣れてるから」

俺の謝罪に余裕の態度で答えるそけつと。里一番の美人だというのは伊達じゃない様だ。

「そうか…では改めて、俺はテイラー。今は鎧を着ていないがクルセイダーの職に就いていて、普段はアクセルの街で冒険者稼業をしている」

「アクセル？…もしかしてゆんゆんの結婚話の関係者だったりする？」

ふむ、里中に広まっていると言っていたし。当然知っておかしくは無いか。

「ああ、そのゆんゆんの結婚相手…と間違えられている奴と同じパーティーを組んでい

る。今回はその誤解を解くためにここに来たんだ」

「あらあら、やっぱりそうだったのね。そうよねー、あのゆんゆんがいきなり結婚だなんてするわけないもの」

そけつとは納得するように、目を閉じてうんうんと頷いている。妙に子供っぽい仕草だが、彼女がすると絵になるなあ。

「一番の問題になりそうなゆんゆんの父親…族長の所には今ゆんゆんと一緒に仲間が二人向かっている。そけつとさんも良かったら誤解を解いて回ってくれとありがたい」
「わかったわ。じきに族長から知らされるだろうけど、一応私からも伝えておくわね」

占い師として生計を立てているのだからそれなりに顔も広い事だろう、後は族長の説得が上手くいけばこの件については安心だな。

「それはそれとして…テイラーさんはどんな事を占いたいのかしら？ゆんゆんの知人というのならばそれなりにサービスはするつもりよ？」

「うーむ、占って貰いたい事か…」

正直言うとも何も思い浮かばない。占いで貰うなんて初めてだし、料金の相場もさっぱりだ。

「ちなみにそけつとの占いの的中率はほぼ100%って言って良いくらいなんだよ。折角のサービスなんだし、そこんとこ踏まえて占って貰うといいかもね」

「100%!?!」

何を占って貰うかで悩んでいる様に見えるのか、ねりまきが補足の情報を教えてくれたのだが：予想外過ぎてビックリした。ほぼ100%って：それは占いというか予言と言っても過言では無いだろう。こうなるとますます悩ましくなってしまう、下手な事を聞けないじゃないか。

驚きのあまり、半ば固まっている俺の耳元にねりまきは顔を寄せると。

「ちなみにサービス抜きだと割とえげつない料金なんだよ？占って貰う内容にもよるけど、貴族相手だと容赦無く取ってるみたい」

こそつと更なる追加情報。けど、そけつとの顔を見る限り何を聞かされたのかバレバレかもしれない。：多分俺の表情にも出てしまっているだろうしな。

「ふふっ…」

そけつとはねりまきの言葉を否定する事も無く、少しだけ満足げというか得意そうな笑みを浮かべてこつちを見つめ続けている。こうなると腹をくくるしかないか：一応持ち合わせを伝えた上で、あたりさわりの無さそうな事を…。

ズガン！

「!?!」

突然の爆音、そしてわずかに揺れる地面に驚いて思わず席を立つ。

ああ、いつものか……って違う！ここはアクセルじゃ無いんだからカズマのこのめぐみんの爆裂魔法が影響があるはずが無い！

「今の音……雷だよな？でも、外は晴れだったはずだし……」

「んー……魔王軍でも攻めてきたのかしら？」

「魔王軍が!!」

——そういえば紅魔の里は常日頃から魔王軍による攻撃を受け続けていると聞いた事がある。強力な魔法を操る紅魔族は魔王軍にとつても脅威を感じる存在なのだろう。

くそっ、あんまりにもどかな風景に失念していた。こういう時こそ魔法使いの盾になるのがクルセイダーである俺の役目だというのに。

「そうかなー？どうせぶつちんとかがカツコつげに雷落としただけじゃないの？」

「ぶつち……え!!」

「そのほうが可能性高そうねー。そんなことばっかしてるから、いつまで経っても校長の座につけないんじゃないかしら？」

「はああ!!」

理解が追い付かない。さっきのが……カツコつげ？しかも魔王軍が来るよりも可能性が？……え？

「とりあえず出てみましょうか」

「そうだね」

呆ける俺を置いて、二人は外に出て行ってしまった。

「あ……ちよ……ちよつと!」

慌てて外に飛び出すと、二人は空を見上げながら辺りを見渡していた。一応魔王軍を警戒してか、そけつとは何かの模様が刻まれた木製の杖を持っている。

「少なくとも魔王軍じゃなさそうね?」

「うん、来てたら自警団の連中が合図を出してるだろうし」

二人に倣って俺も周りを見渡してみたが、二人の言う通り襲撃があつたという訳では無さそうだ。そして空は相変わらずの快晴、雷が落ちる要素なんて一つも無い。

「あ、さつき雷落ちたのってあそこじゃない?」

ねりまきが何かに気付いたのか、声を上げて指をさしている。その方を見ると、確かに黒煙が上がっていた。

「あれは……族長の家よねえ?」

「そうだね、もしかしてゆんゆん達の説得失敗しちゃったのかな? 族長ってゆんゆんの事になると手が早いからねー」

「なっ!?!」

二人は緊張感無くのんびりと語っているがそれはヤバイんじゃないのか!?! そりゃあ

結婚相手としてダストなんか連れて来られたらキレても仕方ないが、ぶん殴るとあんな規模の魔法とじや訳が違うぞ！

どうする…今から駆けつけて間に合うものか？そもそも俺が向かって大丈夫なのか？装備も何も無い状態であんな魔法食らったら確実にやられてしまうのは目に見えているぞ…いや、例えあつたとしても耐えられないだろう。くそっ！一体どうしたら…。「そうだ！そけつとさん！今あそこで何が起こっているのか、そして俺はこれからどうするのが最適なのかを占ってくれないか！」

「別に良いけど…サービスで見えあげれるのは一回よ？それでもいいの？」

妙な所で律儀ではあるが、それは彼女が自身の占いにプライドを持っているからだろ。確かに破格の料金で彼女に将来の事を占って貰うのは千載一遇のチャンスだと言える、しかし…。

「ここで仲間の安否を気遣わないなら、俺のクルセイダーとしての将来なんてたかが知れている。これが今の俺の手持ち全部だ」

俺から財布を押し付けられたそけつとは、呆けた様に俺の顔を見つめた後。

「分かったわ」

目を閉じて笑みを浮かべると、片手を前に出して手のひらを上に向ける。すると、いかなる魔法を使ったのか。家の中から水晶玉が飛んできてその手に収まった。

「……………」

そけつとが水晶玉を覗き込むと、水晶玉の中心がほのかな光を放ち始める。

「…うん、貴方の仲間って金髪の男とポニーテールの女の子よね？大丈夫、ゆんゆんが守ってくれたおかげで無事みたい」

「そうか…とりあえずは安心だな」

どういう経緯で父親が暴走したかはさておき、ゆんゆんは二人を守るという約束はしっかり守ってくれたみたいだ。

「あ…これは…」

そけつとが水晶玉を覗きながら残念そうな？声を上げた。

「な、なにかあったのか？」

「…うん、こんな怒ってるゆんゆん見るの初めてかも。族長が正座で説教されてるわね」

「…そうか」

まあ…そうなるか。流石に魔法で攻撃するのはやりすぎだ。下手をすれば死んでもおかしくない威力だったしな。

「仲間の無事が確認できたところでサービスの分はおしまいね、料金は…こんなところかしら」

そけつとは渡した財布から1000エリス紙幣を抜き取ると、財布を返してきた。

「それだけでいいのか？」

「占う内容に寄って料金は違うのよ。後は私の気分ね、だから…」

再度そけつとは水晶玉を覗き込むと。

「…うん。これから貴方がどうするのが最適か、だったわよね？ふふつ…このままねりまきと一緒に観光すると良い事があるかもしれないわ」

「え？それは…」

あくまで助けに向かった方が良いかどうかを聞いたつもりだったんだが…。

「これもサービスよ。貴方の、仲間を想う心意気を見せられて凄く気分が良いの」

「……………」

別にカッコつけた訳では無かったのだが…改めてそう言われると恥ずかしさが込み上げてくる。隠すような事では無いけれど…あいつらには絶対知られたくないな、絶対からかわれるに決まっている。

「ねりまきも、テイラーさんの案内宜しくね」

「えつ…う、うん。えーつと…私は何か気を付けたりすることある？」

「ねりまきはねりまきらしくしてれば良いの、変に気張ったりする事無いわ」

本当に気分が良いのか、そけつとはそう言われて逆に悩んでいるねりまきを笑顔で眺

めている。

確かに変に気を遣って貰うよりは普通に案内して貰う方がこつちとしても気が楽だ。ダスト達の方はなんとか話が付いたようだし、俺の方は観光に専念させて貰うとしよう。

5話

「それじゃまた、お店にも来てねー」

「あいよ、親父さんにもよろしくな」

ねりまきが手を振ってるので俺も手を振っておっさんを見送る。

偶然出会ったあのおっさんは農家の人だったようで、先ほど上級魔法でダイナミックな耕作をしていた農地の方へと歩いていった。

「ちよつと仕入れの事で話し込んでごめんね、えーつと…次に行けそうなのは…」
ねりまきは遠くを見渡しながら考え始めた。正直なところ、もうおなか一杯な感じなのだが…逆に慣れ始めても来たので開き直りつつもある。

そけつとと別れた後、ねりまきの案内で何か所か施設等を見て回ったのだが…どこもかしこも色んな意味でぶつとんでいて驚きの連続だった。『願いの泉』『猫耳神社』『聖剣の岩』そして『農業区』。それとここまで出会った十数人の紅魔族による名乗り上げ。初めのうちは『またか…』と思いつながら聞いていたのが、『何の職業なんだろう』と楽しめる様に思ってしまった時点で色々諦めがついてきてしまった。

「ちよつと歩くけど『魔神の丘』かな？ 疲れたなら商業区…うちの近くに戻って喫茶店

『アッドリーポイズン』で休む?」

「そうだな…特に疲れてはいないから魔神の丘でいいぞ、その若干物騒な名前の喫茶店にはその後に行こう」

ここでは紅魔族のすることにいちいち大げさに反応する事は無い。悟りのような気持ちで受け入れるのが正しい対応なのだ。

「りよーかい。じゃあついてきて」

俺の返答に笑って答えると、ねりまきははたから見ていても分かるくらいに楽しそうに先導を始める。

それに、案内役のねりまきのおかげで退屈はしていない。人見知りという訳ではないが、俺はダスト達に比べれば『お堅い』性格をしていると自負している。それが大分年下の女の子と二人きりだというのに息苦しさを感じずにいられるのは、相手がねりまきだからこそだろう。

以前、同じように真面目な性格をした女性と二人で過ごした次期があつたがここまで楽しいと思う事は無かった。いや、そもそもあの時はそういう雰囲気でも無かったのだが。案外、俺はねりまきのような性格の女性と相性がいいのかもしれない…って何を考えてるんだ俺は。

「ん?誰かここに走って来てる?」

「えっ?」

ねりまきの声で我に返り、自身も做つて道の先を確認する。確かに、今から向かおうとしていた魔神の丘に続く道の先から誰かがこつちに向かつてきていた。その誰かは前傾姿勢で全力疾走しているようで、もう十数秒もすればすれ違う…。

「ねりまき、こつちだ」

「ふえ?」

瞬時の判断でねりまきの手を引いて近くに生えていた木の影に隠れる。

「なになに? 知り合い?」

「…だと思ふ。嫌な予感がするからスルーしたほうが良さそうだ」

俺の言葉に目をパチクリとさせるねりまき。けれど言いたい事は伝わったのか、静かに大人しくしてくれている。

「ちくしょう! ちくしょう! ちつくしよー!」

次の瞬間。悔しそうな声を上げながら、その人物は俺達に気付くことなく通り過ぎて行った。

「……………」

通り過ぎて行ったのを確認して木の影から道に戻る。なんとなく予感はずしたが声と後ろ姿から確信した、あいつは…。

「キース…まさか、またなのか？」

「見た事無い人だから外の人みたいだけど、もしかして仲間の人？」

「ああ、さつき別の紅魔族の人と観光に行くかと別れていたのだが…どうやらあまり有り難くない事があつたようだな」

俺が考えていた通りの事だったとしたら、いま魔神の丘には先ほどの二人が残っているという事だろう。もし観光を遠慮していた俺がねりまきと一緒に居る事が知られたとしたら…。

「ねりまき、すまないが魔神の丘はやめにして一旦戻ろう。なんだか休憩したい気分になつてきた」

「あ…後が面倒な事になりそうだ。またしばらくはヤケ酒に付き合わされるんだろ
うなあ…。」

「う、うん…それは別に良いんだけど…」

「うん？」

ねりまきにしては珍しく齒切れの悪い返事だな。

「あ、あのさテイラー…その、手が…」

キースが走り去つた方からねりまきへと目を向ける。そこには恥ずかしそうに頬を染めているねりまきと、引き寄せた時から繋いだままの手…。

「わ、悪い！ついで！」

「ううん！お、男の人から手を繋がれたのって初めてでちよつとビックリしただけだから！」

慌てて手を放すとねりまきはフオローをしてくれた。

しまった…打ち解けられたように思えてもまだ会ってから数時間も経っていないだ、いきなりそんな事をされたら驚きもするだろう。ましてや年頃の女の子でもある、もう少し気を付けてあげないといけなかったか…。

「ホントのホントに大丈夫だから気にしないで！じゃあ、喫茶店で休憩だよね？ついてきて！」

ねりまきはまくし立てるように喋ると若干ぎこちなく大股で歩き始めた。

「あ、ああ…」

本当に気を付けよう。この事がねりまきの親父さんにバレたら、ダストの二の舞になりかねん——。

——道中何人かの紅魔族とすれ違い、その名乗り上げを聞いたたりしている内にねりまきとの妙な空気は無くなってくれた。女性…いや、女の子とあんな雰囲気になったのは初めての事だったから、今回ばかりはあの名乗り上げに感謝したい。

そして到着した喫茶店『デッドリーポイズン』は…やはりというか名前以外は普通の

喫茶店だった。残念な事に店のマスターの名乗り上げも割と普通で、次に会う紅魔族の人はもつといい名乗り上げを…ん？

「あれ？あるえだ、珍しい」

案内された席に向かっているとここでねりまきが声を上げた。相手は一人でテーブル席に座り、テーブルに置いた紙に何かを書いている女の子だ。

「ふむ…そのセリフはそっくりそのままお返しするよ、ねりまき」

あるえと呼ばれたその子はテーブルから顔を上げてこちらを見上げてきた。毛先がロールしているセミロングの黒髪に蝙蝠の翼のような髪飾り、そして片目にどこかで見たとような眼帯をしている。

「あるえの場合出歩いてる事自体が珍しいでしょ？私だってたまには喫茶店で休んだりもするよ」

「そうだね、そういう時もあるだろう…けど男とデートしてるなんて初めてじゃないのかい？」

「なっ!？」

あるえの指摘にねりまきの顔が真っ赤になる。どうやらねりまきと友達のようにだが、ようやく戻りかけた雰囲気を引き戻さないで貰いたい。

「違うから！観光の案内してるだけだから！」

「ふーん…確かに見ない顔だね。我が名はあるえ、紅魔族一の小説家！いずれ世界を感動へと導く者！」

「俺はテイラー、ちよつとした用でこの里に来たのだが時間が余つてね。宿を借りたついでに、ねりまきに案内を頼んだんだ」

またあんな変な空気になるのはごめんなので俺からもフオローしておこう。それにしても小説家か、ここにきて珍しい事を仕事にしている紅魔族に出会つたな。

「紅魔族の自己紹介にも慣れたものみたいだね。とりあえず、色々と観光して回つたのは嘘ではないみたいだ。まあ、立ち話もなんだし良かったら座るといい」

あるえは食べ終わつて空になつていた食器を端に寄せて、テーブルにスペースを作つてくれた。

特に断る理由も無いので同席くらいいいだろう。俺が先にねりまきに座るように促すと、ねりまきはあるえの斜め向かいの席に座つた。必然、俺はあるえの対面に座る事になる。

色々と考えさせられる立ち位置だが気にしないでおこう、俺もねりまきも特に他意は無いのだから…つてなんでねりまきは隣に座る俺と距離を置いてるんだ？

「……………」

ねりまきの顔を見てみるとまだ少し赤くなっている。ああ…デートとか言われたか

ら近すぎるとまたからかわれると思ったのか。

「では…二人のなれそめを聞かせて貰おうか。ネタに詰まって散歩していたら、族長を説教するゆんゆんどころかこんな面白そうなネタに出くわすとは…犬も歩けば棒に当たるとはよく言ったものだ」

あるえはペンを片手に心なしかウキウキした口調で聞いてきた。

…なるほどこういう子なのか。カズマのところのめぐみんしかり、里に来てすぐ出会った二人しかり…紅魔族の年頃の女の子はクセが強い子が多いなあ。

「だから案内してるだけだってば。あんまりしつこいとあるえのお父さんに聞いたあるえの事、ゆんゆんの結婚話ぐらいに尾ひれつけて拡散するよ。あるえのお父さん、うちの常連なんだからネタには事欠かないんだからね」

「ぐっ…痛い所をついてくる。わかったわかったもう言わないよ」

友達同士らしく互いに遠慮の無い会話をする二人。

ちよつと驚いたのは俺に対する話し方とほとんど変わりが無い事だ。いや、この場合は俺に対する話し方が友人に対するそれと変わらないと言うべきだろう。初めからフレンドリーだなと思ってはいたが、本当に裏表の無い素直な性格なのだなど再認識させられた。

「はいよ、お冷とおしぼりとメニューだよ。今日のオススメは一撃熊のシチューだね、日

替わりは焼き鮭定食になるよ」

「ありがたいございます…って！こんな高級食材をこんな値段で?!」

マスターから受け取ったメニューを一目見て思わず声を上げてしまった。オススメで一撃熊がさらつと出てきたのも驚きだが、メニューに載っている料理の食材はどれもこれも倒したり集めたりするのが困難な物ばかりだったのだ。

「はっはっは！外からのお客さんは毎度驚いてくれて嬉しいねえ」

そうか、上級魔法を使いこなす紅魔族にとつては強いモンスター素材調達なんて苦では無いんだ。テレポートも使えるから場所の登録さえしておけば新鮮な食材もすぐ運搬できる。余計な人件費や輸送費もかからないから、この値段でも大丈夫なのだろう。

「じゃ、じゃあオススメの一撃熊のシチューで」

「私は日替わりにしようかな」

「あいよ。料金は前金で宜しくね」

支払うために財布を取り出したところで、隣のねりまきも同じように財布を取り出そうとしているのが見えた。

「ねりまき、ここは俺が払おう。案内もして貰ってるし、そのお礼だ」

「えっ？ほんと！やった！今月ちよつと厳しかったんだよね！」

ねりまきは俺の提案をあっさりと受けてくれた。変に気を遣って拒否されるよりも、こうやって素直に受けてくれた方が奢る側としては逆に嬉しいものだ。

「まいどあり!…ところであるえちゃん、食後のコーヒーでどんだけ粘る気だい?」

「ピークも過ぎてるし、さっきの族長騒ぎでどちらにしても空いてたんだからいいじゃないか」

「…そういう問題じゃないんだけどなあ」

マスターはそう眩くと、あるえが端に寄せた食器を回収して厨房へと入っていった。

「あるえー、メニユー一つで長居する客は嫌われるよー」

「今日はたまたまさ、ゆんゆんを相手に土下座をする族長を見てたら妙に筆が乗ってしまってるね」

あるえはそう言うものの、なんとなくではあるが常習な気がしてならない。マスターのあしらう方にまったく躊躇というものが無かったからな…。

「そういえば…そんな愉快な光景の近くに外の人らしき人も居たけど、もしかしてティラーさんの知り合いかな?」

「金髪のチンピラとポニーテールの女の子だしたら俺の仲間で間違いないな。多分知ってると思うが、金髪の方がゆんゆんの婚約者と間違えられていた奴だ」

「なるほどなるほど」

言いながら紙に何かを書く手を止めないあるえ。こういったあらゆる事からネタを拾う姿は小説家らしいと思うのだが、逆を言うとなんでもなんでもネタにするという危険さも持ち合わせて居る。うーん…ダストの二の舞を避けたい身としては、余計な事は喋らない方が良いかもしれない。

「ということは、テイラーさんは普段はアクセル…という街だったかな？そこで冒険者として活動をしているってことかい？ゆんゆんの婚約者はアクセルという街に居るという話だったからね」

俺の決意も空しく。あるえはネタの為なのか単なる好奇心なのか、根掘り葉掘り聞こうとする構えである。

俺は助けを求める為に隣を見ると。

「……………」

そこには期待に満ちた目で俺を見つめるねりまきが居た。

「…ねりまき？」

「ごめんテイラー。私も外の事聞きたい」

「……………」

ここにきて味方が居なくなってしまった。

「まあまあテイラーさん、これはある意味仕方のない事なんだよ。普段は里から一歩も

出ない生活をしてるからね、年頃の紅魔族は皆外に興味津津なのさ」

あるえの言葉にねりまきは頷いて同意している。ただ若干バツの悪そうな顔をしているように見える所、もしかしたら元々案内の代償として外の事を聞いたりしようと考えていたのかもしれない。

とはいえ、ねりまきもそうなのだとしたらそんなに目くじら立てる事でもない。むしろこっちの方こそ色々教えて貰ったのだから当然の権利だろう。田舎から遠く離れた都会への憧れ：魔王も恐れる紅魔族といえども、その辺りは年頃の女の子と変わらな
いんだな。

「わかった。ねりまきにはお世話になりっぱなしだし、俺で良かったら色々と話してあげよう。ただ：俺は面白おかしく話すのが苦手だな、つまらなかつたりしたらすまない」

俺の答えにねりまきとあるえは嬉しそうな顔をして頷いてくれる。こんなに期待されてしまったては、出来る限り二人が満足できるように頑張るしかないな。

「じゃあとりあえずアクセルという街についてから……」

やはりというか、俺はポキキャブラリーというものが貧相だった。どうしても事実をそのまま話す：説明のような話し方できず、話しながら色々と考えてはみたものの最終的には普通に話すしか無くなってしまったのだ。

しかし、そんな俺の拙い話でも二人には魅力的だったようで。時折手を上げて質問をしながら、冒険者の生活というものを興味津々で聞き入ってくれた。

それは食事が来る前だけでなく、食事中も…そして食べ終わった後も続き。先程ねりまきが注意していたにも関わらず、俺達も食後のコーヒーで随分と長居することになつてしまった。

「ごちそうさまー」

「またくるよ」

「ごちそうさまでした…長い時間申し訳ない」

「まあ、外の人の話じゃ仕方ねえ。また来てくれよ」

各々マスターに声を掛けて店を出る。

反省だな…二人の反応が楽しくて柄にも無く話過ぎてしまった。お詫びといつては何だが、明日帰る前に皆で寄れるように提案するとしよう。

「テイラーさん、楽しい話をどうもありがとう。私は早速家に帰って執筆を始めさせてもらうよ」

「参考になつたのならなによりだ。もし小説を見かけたら読ませてもらうよ」

「またねあるえ。小説も良いけどたまにはこうやって出歩きなよ」

そうしてあるえはさつさと帰ってしまった。気持ち早歩きに見えるのは気のせい

は無いだらう。

「テイラー、私からもありがとう。もう、すつ…ごい興奮した！やっぱり前衛と後衛の助け合いつて燃えるよね！あー…私もいつかやってみたいなあ」

ねりまきはうつとりとした表情で目を輝かせている…というか比喩でもなく本当に赤く光っていた。

以前カズマに聞いたのだが、紅魔族というのは興奮すると目が赤く輝くのだという。もし街で目が光ってるめぐみんを見かけたら逃げた方が良いとも言っていたが…流石に目が光るほどに興奮してるだけで危険なのはめぐみんくらいだろう。

「ねりまきも、楽しんでくれたようで良かったよ」

ちなみに話の中で二人が一番興味を持って聞いていたのはクエストでの戦闘の場面だった。何故かと聞いてみると、紅魔族の戦闘はおおざっぱすぎて連携も何も無いからだという。そして意外な事に、ウィザードであるリーンの活躍と同じくらいにクルセイダーである俺の仕事にも興味を持ってくれた。

これにもちゃんとした理由があり、今回紅魔の里に来たきっかけの一つであるゆんゆんが挑んだ族長になる試練に関する事だ。どうやら族長になる試練というのは有名な冒険譚をベースに構想されたもののように、特に最終試練は本来は前衛の人を連れて二人一組で行うモンスター相手の実戦なのだそうだ。

そういった経緯もあり、年頃の紅魔族の女の子は自分を守ってくれる前衛というものに強い憧れを抱く事が多いという。まあ実際のところ紅魔族は単体でも強すぎるくらいなので、前衛が必要な戦闘なんて皆無なのも憧れる要因の一つなのだろう。

「じゃあじゃあ、腹ごしらえも済んだことだしどこいこっか？もう張り切って案内しちゃうよ！」

「はは、こつちも十分なくらい楽しませて貰ってるから気を張る事は無いぞ。そうだな…折角商業区に来てるんだし、この辺りの店を案内して貰えるか？」

「りようかい…テイラーが見て面白そうな店と言えば…鍛冶屋かな？うちの里で作ってるのは良いものばっかりだよ！」

ねりまきは上機嫌にウインクまで披露して歩き出した。俺はその元気な足取りに遅れないように後を付けつつ、思わずニヤケそうな口元を抑えていた。

実は紅魔族の里に来るにあたって一番楽しみだったのは紅魔族が作成した武器を直に見れる事だ。彼女たちが冒険譚に憧れを抱くように、俺のような前衛職にとって紅魔族特製の武具というのは憧れだからである。

紅魔族の作る武具は装備自体に特殊な性能が付加されていて、それだけで戦闘を優位に進める事が出来る。しかしその分非常に高価で、王都等の都市部にある、入るのもためらわれるような高級店にしか卸されていなかったりする。

しかし。さっきの喫茶店でのあの料理…あんな高級素材を使ってるのにあの値段という事を考えると、もしかしたらこの里の中で買うのならば俺にも十分に手が届く値段なのかもしれないという期待が湧いてくる。最近ヒドラや亀のおかげで臨時収入もあつたことだし、いよいよ俺も魔剣や魔法防具持つ時が来たのかも知れない！

6 話

考えが甘かった。喫茶店とは違い、完全に“外の人”相手の商売ではあんな格安の値段は在り得なかったのだ。

「折角来てもらったのに悪いねえ、流石にこれ以上はまけられねえよ」

「いえ…相場つていうものは俺も理解してます。この値段でも十分すぎる程安くしてくれてますよ」

無理をすれば買えなくもない…！けど、無理して買ったところで生活が回らなくなつては意味が無い。大事に使えば一生モノの買物だ、勢いで買っていい買い物じゃないだろう。

「でも諦めたつて訳じゃ無いですよ、折角ですしどんな武具があるか教えて貰つても良いですか？」

「おお！勿論だとも！紅魔族だとカツコイイ造形ばつか気にして肝心の性能は気にしてくれねえからなあ…まあ俺もそうだから文句は言わねえけどよ。性能もすっかり見られる外の人はありがたい限りだよ」

店の親父はそう言つて何本かの剣を選んで大きめのテーブルへと並べ始めた。

「兄ちゃんも知ってるだろうが俺達、紅魔族の作る武器は色々な効果がついている。まずコイツだが、習得してなくても炎の中級魔法が撃てる炎の魔剣だ。その名も『レーヴァンティン』！真つ赤な刀身が綺麗だろう！」

「中級魔法?!しかも習得していなくてもって…スクロールとは別物なんですか!」

いきなりとんでもない物が出てきた。ちなみにスクロールとは魔法を封じてある巻物で、ある程度の魔力がある人物が使う事でその魔法を使う事が出来る“使い捨て”の魔道具だ。

「あんなオモチャと一緒にしてもらっちゃ困るぜ!ここんとこに赤い宝石がついてるだろう?これは紅魔族特製の魔石でな、特殊な加工で炎の魔法を封じてあるのさ。持ち主の魔力がある限り何回でも使えるぜ、ただ…兄ちゃんみたいなクルセイダーなら1〜2発撃てれば良い方かね?そこは職業差だから勘弁してくれよ」

「そんなところで文句なんて言いませんよ!確かにクルセイダーにも魔力を使うスキルはありますけど基本的には余りがちなんです、それを攻撃魔法として自身が使えるなんて…」

そう、魔力というとウィザードやプリースト等の魔法職しか重要視しない事が多いのだが、俺を始めとした近接職でも多少は魔力を使って使用するスキルというものを持っている。クルセイダーで言うなら『デコイ』なんかが良い例で、自身の魔力で発動

して敵の注意を引き付けている。

魔法職と比べれば魔力の総量は少ないが、その分各スキルの消費自体が少なかったり乱発するような物でもない。魔力切れを起こすどころか、まったく使わないという場合もあつたりするくらいだ。

「ふふふ、普段俺達がやつてるみたい魔法で敵を吹っ飛ばすと快感だぞ。似たような魔剣を持つてるやつらもその辺を気に入ってくれてるな、戦い方の幅が広がったつてよ。当然武器としても優秀だぜ、中には魔法と放つと同時に切りつけるっていう…『必殺技』を使っているのも居る」

「おおお！そんな使い方も出来るんですか!?!」

「おうよーそんで攻撃するときに技名を叫んでみるよ！めちやくちやカツコイイだろう！『ファイアースラッシュ！』とかなっ！」

「はー」

親父に釣られて俺もテンションが上がってしまった。けどこれは仕方ない、流石に叫ぶのは恥ずかしいが職業的に敵を一気に倒せるようなスキルが少ないのだ。そういうのに憧れを持つても良いじゃないか。

「こっちの剣は風、こっちは氷の属性だな。これは光属性だが攻撃魔法とはちよつと勝手が違う。魔力を込めるとその間武器の射程が伸びる魔法が込められてるんだ」

「属性によっても色々使い道がありそうですね…射程が伸びるといっても面白いし、本当にどの武器も魅力的過ぎますよ」

「そうだ、兄ちゃんは今クルセイダーなんだろう？武器だけじゃなくて防具も良い物が揃ってるぜ」

親父はそう言うと、今度は防具関係が置いてある棚に俺を案内する。

「これは特殊な効果は無いが魔法攻撃にも強い鎧だ、並みの中級魔法ぐらいなら防げると思うぜ。あとは身につけると身体能力が向上する奴が何種類か…例えばこの小手指は筋力が上がる魔法が込められてるな」

「確かに派手さは無いけれどこれでも十分すぎるぐらいの効果ですね。しかもこの値段なら一つの部位くらい…」

この小手指は案外買いかもしれない。単純に攻撃力も上がるが、盾で防御する時にも有用だ。防具としても普通に丈夫だろうし…無理し過ぎなくても買える値段でもある。うう…悩むなあ、どちらにしても強化は図れるが攻撃にするか防御にするか…。

「こんなのもあるぞ！…ついでに魔石は武器と変わらないんだがな、こっちは盾につけてある！」

そんな葛藤をしている俺に、親父は嬉々として商品を紹介し続けてくる。あああ…ただでさえ迷っているのにさらに魅力的な物を紹介しないでくれ！

「盾だから勿論相手の攻撃を受けるのが基本だがな、その攻撃を受けた時に魔法を発動すれば……」

「…相手への絶好のカウンターってなるわけですね。動き回る相手に魔法を撃つよりも確実に当てられる訳か」

「そのとおり！しかも炎攻撃にも強くなってるからこれがあればドラゴンのプレスだつて怖くねえぞ！……まあ相手の属性にも寄るんだがな、そんな時はあれだ、全属性揃えちまえば良くないか？」

それが出来ればこんなに悩んでない。まあ明らかに冗談なんだろう、自慢するように盾を両手に持つて笑ってるし。

「他には面白い効果のもんあったかなあ？」

親父はまだまだ紹介し足りないようで、店内を見渡しながら悩んでいる。

有り難いがこれ以上は頭がパンクしそうだ。ちよつと外に出て深呼吸の一つでも…。

「…あ」

「おお！こいつがあつたか！兄ちゃんこいつはな！……あ」

まずは俺がソレを見て固まり。続けて親父もソレを見てしまったのだろう、テンションが一気に下がって同じように固まった。

「……………」

俺達の視線の先。そこには思いっきり暇そうに、窓から外を眺めているねりまきの姿があったからだ。

来た時に親父が座っていたカウンターの椅子に座って足をブラブラとしているその様は、さつきまで熱狂していた俺達の心を罪悪感でいっぱいにするのに十分だった。

「……………!?!」

俺達がじつと見ている事に気づいたのだろう。ねりまきは「ハッ」としたように驚いた後。

「……………」

無言のまま笑顔を作り、軽く手を振ってくれた。

「……………」

その明らかに気を遣ってくれた仕草に俺達は思わず一步後ずさる。連れの女の子を完全に忘れてはしゃいでる男：最低な構図だな。

これは俺もキースの事をとやかく言えない：俺達二人がモテない訳だ。ダストの奴は意外とそういうところは気が回る（意図して逆に動いている時もあるが）、なんだかなだあいつの周りに人が集まるのもかくあるべきなのだろう。

「…すみません、今日はこの辺で」

「…おう、また来てくれな」

ぎこちなく笑っているねりまきから目を逸らさず、隣に居る親父と最低限の言葉を交わす。そのままねりまきに向けて歩を進めると、ねりまきはバツの悪そうな顔をしながら椅子から立ち上がった。

ああ…そうじゃないんだねりまき、頼むから『自分が楽しい時間に水を差してしまつた』みたいな申し訳なさそうな顔をしないでくれ。

「えつと…」

「すまなかつた。ねりまきを放つて置いて夢中になつてしまつた」

ねりまきの言葉を遮つてまずは頭を下げて謝つた。ねりまきは何が言いたいのかは大体想像がついているが、真つ先に言わなければならぬ事だ。

「ち、違つてば…テイラーが謝る事なんて無いから頭上げてよ」

顔上げると、やはり申し訳なさそうな顔をしているねりまきの顔。

「私はテイラーが楽しめる様に案内する役目なんだから、さつきみたく熱中できるものがあれば私なんて気にしなくていいんだよ」

「ねりまきの言いたい事はわかつている、けど俺が今回の観光を楽しめていたのはねりまきが居たからこそだ。ならば案内してくれている立場とは言えねりまきも一緒に楽しめなくちゃダメだと俺は思う。例え興味が無い事だとしても、ほつたらかしの楽しい理由にはならないだろう」

「そりゃあ、暇そうにしてたといえはそうだけど……」

今度は少し拗ねたような顔をしているねりまきの手を取ると、俺はそのまま店の外に出た。

このままここで問答してたら親父に迷惑がかかる……ということもあるが、実際は失態を犯したこの場からさっさと逃げ出したいだけだ。まあ場所を変えたところで一番の問題は解決しないのだけど。

「……………」

ねりまきはとりあえず抵抗する事もなくついてきてくれた。さて……こんな時、女の子には何をしてあげるのが正解なんだろう？俺のいままでの人生において、こんな場面になつた事なんて全く無い。

「ねえテイラー、本当に気にしなくていいんだよ？」

手を引っ張つて歩き続けていた俺に、ねりまきは優しく声をかけてくれた。あまりの情けなさにねりまきの顔を見れない気持ちではあるが無視なんて出来る訳が無い。

俺は立ち止まつて振り返り、しっかりと顔を見ながら。

「ねりまき……なんというか、その……何かお詫びになりそうなおことは出来ないだろうか？」
「お詫びとかもいってば、私は別に怒つてるって訳じゃないし。逆にこっちが申し訳無いよ、あんなに楽しそうにしてたのに……」

そう、實際我を忘れる程楽しかった。だが……だからこそ、こんな事で連れの子を忘れてしまっていた自分を許す事が出来ない。

「ねりまきが言いたい事は分かっている、けど男としてケジメをつけたいんだ」
「うーん……」

困っているねりまきを見て、自分の事ながら分かつて無いなコイツという考えが頭に浮かぶ。結局のところ、何かをしてあげる事で自己満足を得たいだけじゃないか……。

そんな俺をよそに、ねりまきは少し悩んだ後「うん」と強く頷くと。

「わかった。じゃあついてきて」

そう言って繋いだままの手を引いて歩き出した。

急に手を引かれてややつんのめつたが、すぐに歩調を合わせて後に続く。さて、どこに連れていかれるのか分からないが覚悟は出来ている。ねりまきのためならば、今はどんなことでもやってやる——。

——そうして連れて来られたのは一軒の店。所狭しと物が陳列されていて、小物が多いうように見えて服もあつたり箱詰めされたお菓子があつたりと統一性が全く無い。

「ここは紅魔の里のお土産屋さんなんだ。記念品つてことで手軽に買えるアクセサリーが多くつて、他にも雑多な特産品と……饅頭とかチョコとかクッキーとかのお菓子のお土産を取り扱ってるよ」

「なるほどお土産屋か」

そう言われてみれば他の街のそういった店と似通った部分もあるのだが、置いてある物の種類というか…見たことが無いような物が多すぎてすぐに分からなかった。多分紅魔の里でしか無いような特産品が多いからなのだろう。

「お土産屋って言っても元々はアクセサリー屋だったみたいでね、普通に良い物置いてあるから里の人も買いに来てるんだ…ということだ」

ねりまきはくるりと振り返って俺を見上げると。

「テイラーには私に似合うと思つたアクセサリーを選んでプレゼントしてもらいます。さつきほつたらかしにされた分はチャラにしてあげるから、いっぱい悩んで選んでね」
意地の悪そうな…いやこれは小悪魔的というべきか、ねりまきはそんな笑みを浮かべている。

きっと、女性相手にした事に対する代償としてはかなり甘い裁定だと思う。いやまあ…重い軽いつかのさじ加減なんてサツパリだけど、少なくともねりまきは非常に優しい課題を出してくれたというのは分かった。

「ああ、しつかり吟味して選ばせてもらう。けど…俺はあんまり女性に対する贈り物に詳しくないんだ。どんな物かの説明とか、ねりまき自身の好みとかは聞きながらでも構わないか？」

流石にノーヒントで、自分のセンスだけで選ぶのはキツすぎる。これくらいの救済措置は頂きたいところなのだが…。

「いいよー。テイラーってほんと真面目だよ、別に勢いで決めてくれても大丈夫なのに」

ねりまきは若干呆れているようで、けど楽しそうに笑って了承してくれた。

真面目…真面目か、俺は本当にそうなのだろうか？ ついさつき馬鹿みたいにはしゃいでいたけれど、それでも勢い余って衝動買いまではしなかったのも真面目といえば真面目なんだろうか？ たまには後先考えないで行動するのも…大事なのだろうか？

「じゃあ早速紹介していくね、まずはコレ『古代文字プレート』！」

ねりまきが一つ手に取って見せてくれたのは、恐らく二文字の古代文字が彫られた金属のプレートだった。

「なんて書いてあるんだ？」

「分からないけど見た目がカッコいい文字を選んで適当に作ってるのが大半みたい。一応解説されてるのが何個説明されてるけど…例えばこれは『熱い海』でこつち『日の光』って意味だつてさ」

「へー…確かに造形は面白いな。これでそういう意味になるのか」

日の光か…太陽のように眩しい笑顔のねりまきには中々似合いそうな…何考えてる

んだ俺は。

「あつーこれは紅魔族にも人気のアクセサリーだよ！」

次にねりまきが見せてくれたのは剣の形をしたアクセサリーだ。その剣にはドラゴンが巻き付いていて、その装飾に使われているのは…。

「気付いた？この宝石は魔法石を使つてね、ほんのわずかだけステータスが上がる効果があるんだ。色で種類が分けられてて、紅魔族の皆が持つてるのは大体魔力アップのやつだね。中には色で選んでるのも居るけど」

軽く言っているけど、わずかとはいえステータスが上がる装備が何でこんな所に無造作に売られているんだらうか？この里に居ると色んな物の基準というものが狂つて…あ、さっきの文字のアクセサリーよりは高いな。流石にその辺の価値は分かってるか。

「ああ…なんとなくだけど紅魔族に人気だつていうのは分かる気がするな。ちなみにねりまきは持つてたりするの？」

ここで軽く探りを入れてみる。すでに持つている物を貰つても仕方ないだろう。

「実は持つてないんだよねえ。子供の頃お父さんにねだつた覚えがあるんだけど…『これは男のロマンだから、女の子のお前にはダメだ』なんて変な理屈で却下されたんだ。なんでかこの家でもそんな風に言われてて、男子は大体持つてるのに女子で持つてたのは…ふにふらだけだっけ？確か弟にプレゼントされたとかだったかな？」

「……………」

ねりまきは理不尽だと眉をひそめているが…なんでだろう、妙に納得している自分が居る。まずいなあ…紅魔族に毒されてきてないか、俺。

ともあれ、一応候補の一つとして考えておこう。親父さんには悪いが欲しがっていた物に違いは無いのだから。

「あれ？これって確か…」

入り口付近に置いてある壺に数本、無造作に刺さっているソレには見覚えがあった。

「その木刀？うん、そけつとが杖代わりにしてたよね」

そうだ、彼女が持っていた杖だ。改めて見てみると謎の模様は龍のような絵を彫ってあるようだった。

「杖ってウィザードには大切な物なんだろう？こんな適当に売っていい物なのか？」

俺が知ってるのはリーンの例だけだが、基本的にウィザードが持つ杖も武器扱いのため購入や強化するならば武器屋が扱う物のハズだ。さっきの店では…目に入って無かったが多分あったと思う。

「んーん。ソレただのお土産の木刀だから杖としては使えないよ」

「え？」

「そけつとは単に模様とかが気に入ったから使ってるだけだね。あと残り数本だから……そろそろ新作が出来る頃かなー、好きなデザインのだったら私も買う予定だよ」

いや、まてまて。ってことはそけつとは杖無しで魔王軍との戦いに備えていたって事なのか？いくら紅魔族とはいえそれは危険なんじゃないのか？

「あー……大丈夫大丈夫。そけつとって占いだけじゃなくて魔法も凄いから」

顔に出てしまっていたのか、ねりまきは俺の疑問に気付いてフォローをしてくれた。

「一応普通の杖も持つてるハズなんだけどね、気に入った杖代わりがあるとそつちを優先して使ってるんだ。それでも普通の紅魔族並みには強いから、テイラーが心配することなんて無いよ」

「ああ……うん。それならいいんだ」

こりゃあ……リーンには聞かせられないな。ウィザードの魔法は杖の有無で威力や制御のしやすさ等が大きく変わる、自分に合った杖を選ぶのはウィザードとしての基本。杖の無いウィザードは剣の無い剣士と同じ……なんて言ってたからなあ。

「といっても、木刀に使われてる木は紅魔の里特産の木材……っていうか杖の材料のあまりなんだけどね。まともに作った杖には劣るけど、それなりに効果はあるのかな？」

そう言ってるねりまきは一本の木刀を手に「えい！やあ！」なんて叫びながら素振りをしてる。

ますますリーンに聞かせられないな、この木刀がリーンの杖よりも扱いやすい杖だったら本気で落ち込みそうだ。

「さてと…」

まだ見てないのもあるが大体は見させて貰った。ここからは本腰を入れてねりまきへのプレゼントを選ぶとするか。

7話

「ふんふふーん♪」

「……………」

俺の隣を歩くねりまきはニコニコと笑いながら鼻歌まで歌っていて、一目で上機嫌だと分かる状態だ。先程プレゼントした首飾りが余程気に入ったのか、常に手に持っているじくったり眺めたりを繰り返している。

「…あつー！」

当然注意力は散漫になっていて、地面につまづきそうになるのもこれで四回目だ。…支えて助けてあげるのも四回目だ。

「…気に入ってくれたのは嬉しいが、そろそろ気を付けて歩いてくれないか？」

「えへへえ…テイラーが助けてくれるからいいかなーって」

最初は慌てて助け、二回目はおもしろかしたらと警戒をし始め、三回目からは諦めて隣を歩く事にした。ねりまきもねりまきで、言った通り最初よりも無警戒に歩いている始末だ。

「ごめんごめん、流石にもう止めとくから」

そう言うのと、ねりまきは肩を支えていた俺の手をほどくとそのまま握って歩き始めた。

自然と手を繋ぐ流れになったが：ねりまきと手を繋ぐのも今更だしまあいいか。

「まったく……」

そのため息交じりに呟くものの、俺には首飾りに気を取られてしまっているねりまきにとやかく言う権利は無かったりする。

「……………」

実はねりまきに引かれる手と逆の手で、腰辺りにつけた龍と剣のアクセサリーをいじくっていたりするからだ。

なんかこれ、ついつい触っていたくなるような妙な魅力があるんだよな……。一応筋力もしつかり上がってるし、ねりまきの分も含めて良い買い物だったと言えるだろう。

「ねえテイラー。紅魔の里は楽しんで貰えた？」

不意にねりまきが、振り返らずそんな質問を投げかけてきた。

「ああ勿論だ、本当に来てよかったよ」

俺はその質問に間髪を入れずに答えていた。言った後で自分でも驚くほど自然に出た言葉で、だからこそ本心からの感想なのだと言覚する。

「そっか！」

心底嬉しそうな声を上げ振り向いたねりまきの顔は、満面の笑顔だった。

「また来てくれるよね？」

「そうだな……」

その答えにも即座に勿論だと答えたいところだったが、それには少し問題があった。

まずは移動手段。アクセルからここまで普通に來る場合はそれなりの時間かお金を掛けないと來られない。今回は当事者であるゆんゆんに連れてきて貰ったが、冒険者として活動している以上転送屋をないがしろにしすぎるのは少し抵抗があるのだ。しかも観光や美味しい食事目当てとなればなおさらである。

そしてまともな手段で移動するとなるとスケジュールの問題もある。パーティー活動の合間に訪れるなら高額な転送屋、日数を掛けて移動するならば俺だけ長期間休むなんて自分勝手は出来ないだろう。

「……テイラー？」

そんなことを考えていたら、ねりまきが不安そうな顔をして俺の顔を覗き込んでいた。

「ああ、すまない。また来たいと思っっているよ。まだ見足りない所もあるし、観光し終わったとしても旨くてお得な食事は魅力的だからな」

「だよね！次回も私に案内させてよ！まだまだ面白い所がいっぱいあるんだから！」

またも見惚れるような笑みを見せるねりまきに少々罪悪感を抱く。

また来たいとは思っていても実際はいつ来れるかもわからない…これはいわゆる社交辞令のようなものだからだ。はあ…いつそ変な意地とかプライドを捨てればいいのか、だからといって頻繁にゆんゆんに頼み込むというのもなあ…。

「とうちゃくー」

そうこうしているうちにねりまきの家であり宿屋兼酒場…「サキユバスランジェリー」に帰ってきてしまった。辺りはもう暗くなってきたので外の街頭や装飾が灯されていたのだが…このやたら派手な紫の装飾は完全にいかかわしい店のそれであり、初見だったら色んな意味で入るのに悩む店構えである。

「さあさあ、入って入って。テイラーはお酒飲める？うちも安くて美味しいお酒と料理を取り揃えてあるから、きつと満足できるはずだよ」

「へえ…そりゃあ楽しみだ。もしかして料理はねりまきが作るのか？その腕前見せて貰うでしょう」

「まかせて！お父さん並みとまではまだ行かないけど…学校卒業してから手伝いに専念して、最近は任される事も多くなってきたんだから！」

ねりまきの料理に期待を膨らませつつドアを開ける。

カランカランという音を立てて開いたその先には…。

「ダ〜ス〜ト〜！お前は俺の仲間だよなあ？人生に女なんか必要ねえんだよ！わがままだし！意味分かんない事で急に不機嫌になるし！」

「わかった！わかったからとりあえず離れろ！くそっ！酔ったキースがこんなにウザいと思っただのは初めてだ！テイラーの奴早く帰って…あつ！」

バタン！

とりあえずドアを閉じた。

「…テイラー、いまの人達って」

「分かってる、ただ…ひと呼吸置かせてくれ」

ドアの向こうからはダストのものだろう怒号が聞こえてくる。ああ…楽しい時間もここまですか、このまま押し付けてねりまきの料理を楽しむとかは出来ないんだろうなあ。

覚悟を決め、向こうから無理矢理開けられる前にもう一度ドアを開ける。

「おっ!?キース！ほらテイラーだぞ！お前のダチのテイラーが帰って来たぞ！とつとと離れて慰めてもらえ！」

キースを引きずりながらこつちに向かおうとしていたダストの言葉である。悪いがこの状態のキースを友達と思いたくはない、本当に面倒なのだ。

「テイラー……いや！こいつはテイラーじゃない！」

顔を上げたキースが叫ぶ。

なんだ？これは初めて見る反応だぞ。

「テイラーは俺と同じで女つ気が無い寂しい奴だ！女の子と手繋いで居るテイラーなんてテイラーじゃねえ！」

キースは立ち上がり、俺を指さしながら非難の声を浴びせてくる。

ようやくキースから解放されたダストはキースから距離を取りながら。

「うお!?マジだ！てめえ！俺が死にかけるような目に会つてるときにちやつかり女ひっかけてデートしてやがったのか！この裏切りもんが！」

二人に指摘されてようやくねりまきと手を繋ぎっぱなしだった事に気が付く。

「す、すまん！」

「う、ううん！」

慌てて手を離すと、ねりまきも今気づいたのか顔を赤くしていた。離れたとたん、手のひらに涼しさを感じる。

「ちくしょう！やつぱり俺にはダストしかいねえ！テイラーは良い奴だから仕方ないけど、ダストはクズだから最終的には愛想尽かされて一人になってくれるはずだ！」

「んだと!?クズさ加減じゃお前も似たり寄ったりだろうが！だからモテねえんだよ！」

矛先がズレてくれたが迷惑なものには変わりなかった。こんなときバカを止める役目であるリーンはどうしたのかと店内を見渡すと、離れた席でうんざりした顔をしながら首を横に振っていた。

流石にこの酔い方をしたキースの相手は御免だったか。あと、恐らくダストは酔っている間に酒でも奢って貰おうとしたら絡まれたつてところだろう。

リーンを探すついでに店内の客の様子を見てみたところ、珍しい外の人のケンカを看に酒を飲んでる人が大半だった。本気で迷惑に思っている人は居なさそうだが、それでもやかましい事には変わりない。

仕方ない、さっさとキースを片付けてしまおう。

「重ねてすまないなねりまき、俺の仲間が店で騒いで。すぐになんとかする」

そうねりまきに告げて、俺は騒いでる二人の内キースを捕まえてカウンターに並んで腰を掛けた。

「なんだよテイラー！あの子とよろしくやってんだろ!?俺の事なんて放っておいてくれよー」

「まあとりあえず落ち着け。彼女はこの店の店主の娘さんでな、リーンの提案で暇になった俺の観光の案内をしてくれていただけなんだ」

俺はキースの肩をポンポンと叩いてなだめながら、カウンターの向こうに居る店主に

目配せをする。店主が俺の視線に気づいたのを見計らい、もう片方の手で棚にある度数の高い酒を指さした。

「俺はお前が言う通り女つてもものが分かつてない寂しい奴だよ、こうしてよく二人で飲んでたんだから分かるだろ？」

「…ほんとか？俺達は女にもてない仲間で間違いないか？」

この期に及んでそんな仲間に取り込まれようとするあたり、本当に仲間にはなりたくないがそれは置いておこう。

俺は店主からボトルを受け取ると、多分さつきまでキースとダストが使っていただろうグラスに酒を注ぐ。

「何があつたのかは知らないが、俺はお前の良い所も悪い所も知っている。今日はたま悪い所が出てしまっただけで、良い所を見てお前を気に入ってくれる女性がきつと居るはずだ。ほら、良く分からない事を言つて離れていった女の事なんて飲んで忘れよう」

「テイラー…。そうだよな…。いつかは俺の事を分かってくれる女が表れるハズだよな」

傷心して酩酊状態のキースは本当にチョロいな。言葉に嘘は無いが、お前が女性関係で良い所を見せてくれてる割合はダストよりも低いぞ。というよりダストは…いや、まさかな。

『チン』という小気味良い音を立ててグラスが鳴る。キースは勢い良くグラスの中身を飲み干し、俺は口元でグラスを傾け飲んだふりをした。

「ぷっはあー！」

「その意気だ、ほらもう一杯」

そう言つてキースのグラスと自分のグラスを取り換える。仲間意識を高めるために自分にも注いだ、これからねりまきの料理を頂くのに酔っぱらうのは勿体ない。残すのも悪いし再利用だ。

「うおおお！」

キースはさっきの勢いそのままにグラスをあおり。

「……………」

そのままぐったりとカウンターに突っ伏して動かなくなった。

「よし、運ぶか」

「なーんか…見ててキースが哀れに思えて来たな」

哀れなのは否定しないがお前が言うのか？ダストよ。

「ダスト足の方を持ってくれ、二階の部屋で寝かしておこう」

「あいよ」

椅子から引きずり下ろしたキースを二人で持って二階へ向かう。店内の方からは一

連を肴にしていた地元住民からの「お疲れー」や「鮮やかだったぞ」などの称賛の声が聞こえてきた――。

――部屋に入り、3つ並んだベッドの真ん中にキースを寝かせる。ダストがやや乱暴に放り投げたのは……まあ仕方ない事だろう。

「よし、本当にお疲れだったなダスト」

「ほんとにな……お前いつもこんなんの相手してるのかよ？」

ダストがベットで苦悶の表情を浮かべて眠るキースを指さす。

「コツは酔いつぶす前に一応話は聞いてやる事だ。その時ある程度覚えておいてやると次回、『前回はどうだったよな』なんて話せて仲間意識が高まる。無警戒に酔いつぶさせやすくなるって訳だ」

「……いや、教えられても実践したくねえんだけど」

そう言つて少しため息を漏らすと、ダストは空いているベットに入り込んだ。

「俺ももう寝るわ、ゆんゆんの親父もだったけどキースのせいで疲れた」
「わかった」

確かに、殺されかけたたり絡まれたりで今日一番疲れたのはダストだったかもしれない。思えば早朝からゆんゆんにも絡まれていたのか？ 普段のダストは逆に絡んできてウザがられている訳だし、いい薬になつてくれるかもな。

「あー…テイラー」

部屋を出て、ドアを閉めかけた所でダストから声を掛けられた。

「なんだ？」

「さっきの子…ねりまきだったっけ？ 一日で随分打ち解けたみたいだけど、どうなんだ？」

「……………」

なんというか、ああいう場面を見られたからには聞かれるだろうなと思っていた質問ではあるが。不思議とダストの口調は真剣さを感じるもので、下世話な感じが全く感じられなかった。

「いい子だよ。裏表の無い人懐っこい性格だ。今日楽しく観光できたのは彼女のおかげだな」

そのせいだろうか。俺は、自然と心からの感想を口にしていった。

「そうか」

ダストはそう呟き片手をひらひらと振った後、布団をかぶって寝に入ってしまった。これ以上話すことは無いようだ。

「……………」

ドアを静かに閉め、階下へ降りる。

まったく…たまには無く、普段からこういう気遣いをしてくれれば俺の苦勞も少ないんだがな。

8話

酒場へ行くと客の数が減っていた。多分良い見世物が終わったので帰ったのだろう、残っているのはテーブル席に二組ほどだ。

俺が先ほどのカウンター席に腰を掛けると、リーンがトコトコと寄ってきて隣に座った。

「おつかれー、流石に慣れたものだったね」

からかい半分、関心半分といった笑顔だな。安全圏に居たからのんきなものだが、あんなのキースだから通用するだけだぞ。

「ダストにも話したがコツを教えてやろうか？今度は俺が来る前に抑えといてくれ」
そうすれば折角の楽しい時間をぶち壊されずに済んだのに。

「イヤよ。ほんとに周囲の邪魔になつてたら問答無用だけど、今回はダストが勝手に捕まりに行つてたし。というか、周りの人達にはちゃんと謝つてはおいたのよ。けど『見てて面白い』って逆に気を遣われちゃつて：ほんと恥ずかしいつたらなかつたわ」

「紅魔族の人達は割とおおらかな人が多そうだからなあ。とりあえずリーンもお疲れさん」

単純に強者ゆえというか、気質というか。今日一日回っただけでも紅魔族の人達というのは穏やかな人が多かった。突如奇抜な自己紹介を始めるのを穏やかと言って良いのかは分からないが…少なくとも自分に余裕が無くて周りに迷惑を掛けそうな人は居なかつたように思える。

「おおらか…おおらかねえ…。族長さん、まだゆんゆんに説教されてるのかなあ」

「ああ…」

どこか遠い目をしたリーンの言葉で思い出した。娘の事で頭がいっぱいになったのか、即死級の魔法をぶっぱなすような物騒な人も居たんだ。というか、めぐみんも喧嘩早いし結局は個人に寄るか。俺がそんなのに出会わなかつたのは、そけつこの言う通りねりまきに任せて観光したおかげかもしれないな。

「そんなことよりもさ！あの子！ねりまきちゃんだっけ？テイラーが初対面の女の子とあんなに仲良くなるなんて珍しいじゃない。どんなとこ観光してきたの？手を繋ぐまでなんてなんかきつかけあつたの？もしかしてもしかするの？」

「……………」

一転。リーンは下世話かつ好奇心にあふれた顔でそんな事を聞いてきた。ダストもだったが、絶対に聞いてくると分かっていた事だ。しかしダストがあんな感じに聞いてきた分、相対的にリーンの株が下がっていく。さっきのダストを教えてやりたいなあ、

多分見た事も無いようなリアクションをしてくれるだろう…言わないけど。

「あのな…今リーンも言ったが今日が初対面の女の子だぞ、もしかしても何も無いだろう。ただ彼女が良い子だったただけだ、手を繋いで居たのも暗くなつて危なかっただけだしな。観光のほうは彼女に先導してもらつて色んな所を紹介してもらえたぞ、明日帰る前に食堂と武器屋、それと土産物屋は寄つておくと良い」

「ふーん…」

努めて冷静に答えてやると、リーンはつまらなそうに口を尖らせた。逆にだが、俺がねりまきのことを気に入つて将来を見据えて付き合ふとか言い出したらどうするんだ？まず正気を疑つてくるだろうお前は。

「テイラー、ご飯出来たよー」

そんなバカな事を考えていると、とんでもないセリフを言いながらねりまきがやってきた。いや、他意は無いんだろうけどタイミングが良すぎる。

「今日の夕食はカモネギの唐揚げ定食！ご飯とスープはお代わり出来るからいっぱい食べてね！…つてどしたの？」

「いや、なんでも。ありがとうねりまき」

なんだろうなあ、さつきリーンに言われたような事は無いはずなんだが…なんなんだろうなあこの気持ちは。

「あ!? 申し訳ございません! ご夕食についてお聞きするのを忘れていました! 宜しければ今すぐご用意しましょうか?」

と、ねりまきは俺の隣にリーンが座っている事に気付くと慌てて謝罪をした。普段は砕けた態度をとっているがそこは客商売、その場に対応したしつかりとした姿勢も出来るという訳か。

「大丈夫大丈夫、あたしはさつき店主さんに頼んで済ませてあるから。というか戻ってきてすぐあの状況だったし…あの二人もお店に迷惑かけちゃったって事で、ね?」

リーンは深々と頭を下げているねりまきの頭を撫でながら、優しく語り掛けた。うん、あの二人にも非があるのは間違い無いな。

「あ、ありがとうございます! え…つと、リーンさん、ですよね?」

「うん、テイラーから聞いてたかな?」

「はい! パーティー戦でのウィザードとしての理想的な活躍! 聞かせて貰ってます!」

ねりまきは興奮した様子で撫でていたリーンの手を両手で握り、ぶんぶんと上下に振り始めた。目も赤く輝いているあたり、ねりまきの中でのリーンの評価の高さがうかがえる。リーンはというと、そのテンションの高さにやや引いていた。実力的には明らかに上位である紅魔族からそんな事言われるとは思っても無かったのだろう。というかこの唐揚げ旨いな、ご飯が進む。

「理想的…なのかは分からないけど、まあ普通にこなしてはいるかな？」

「そんな謙遜を！前衛のひととの連携や自身の魔力管理、それに比べたら紅魔族のおおざっぱな戦い方なんて原始人ですよ！」

「そこまで言わなくても…力押しでなんとかなるなら、それに越したことは無いんじゃない？」

スープも旨い。これだけでもご飯と合うような塩加減だ。

「そんな戦い方しか出来ないよ、それが通じなかったときに何も出来なくなっちゃいます。実際魔法が通じなかった魔王軍の幹部には手も足も出ませんでしたし…」

「あーもしかして最初にカズマ達 came 時の事？へえー…そんな強敵を倒しちゃうなんて流石ね」

「そうなんですよーやっぱりその場の状況に応じて臨機応変に戦えるパーティーっていうのが最強なんです。魔法撃ってレポートで逃げるだけとか工夫の欠片もありません」

「そう言われれば確かにね、戦うモンスターも同じようなのばっかとは限らないから。切れる手札は多いほうが便利よね」

そんな感じで（主にねりまきが）白熱したウィザードの戦い方議論を横目に俺は親父さんにお代わりを頼んだ。親父さんは大盛に盛られたご飯を渡しながら「すまんね」と

謝罪の言葉を口にする。俺は「いえ」と短く答えてご飯を受け取った。こりやあ間違いない。後で親父さんの雷が落ちるだろう。仕事を忘れて話に夢中になってるのは自業自得、未来の紅魔族一の女将もまだまだ見習いの様だ。

9話

付け合わせの黄色い野菜の漬物のせいでもう一回お代わりをしてみました。紅魔の里に一週間でも滞在したら確実に肥えてしまう、昼の食堂といい美味しい物の誘惑とは本当に恐ろしい。

あの後リーンは風呂に向かい、ねりまきは案の定親父さんに叱られていた。どうやら風呂の用意も本来はねりまきの仕事だったようで、「ゴンッ！」という拳骨の音が聞こえてきた辺り大分ご立腹だったのだろう。けどこうして叱ってくれるのもねりまきを思つての事、聞きはしませんが母親を見かけない事にも関係しているのかもしれない。誰よりもねりまきの成長を望んでいるのは親父さんなんだろう。

「はあー、これも良い酒だ」

そして俺はと言うと、もう客の居なくなつた酒場で一人で晩酌と洒落込んでいる。親父さんに何個かオススメを選んでもらい、普段は飲めないような酒を贅沢に飲み比べ：堪らないなあ。

「テイラー、まだ居るー？」

そんな俺の所にねりまきがやってきた。水の入ったコップを片手に、もう片方の手は

先ほど叩かれたであろう頭をさすっている。

「ああ、まだ楽しませて貰ってるよ」

「さつきはごめんね。ううう……リーンさんに会えた嬉しきでテンション上がり過ぎちゃった……」

そう言つて俺の隣に座ると「はいお水」と目の間に置いてくれる。そういえばチェイサーの水がもう無かった、何気に飲みすぎていたのだろうか？最後に親父さんが見に来てくれたのはいつだったっけ？

「ありがとう。んぐっ……ぶはあ。親父さんは奥でまだ仕事かな？」

「んーん、寝ちゃった。罰として片付け全部やつとけて。あとリーンさんももう部屋に戻つて寝てると思うよ」

「そうか」

どうやらもう結構な時間になってしまっているようだ。俺が飲み続けて居る限りねりまきも片付けが終わらないだろうし、もう頃合いだろう。

「ごめんなーねりまき、俺もちよつと飲みすぎて居たらしい。片付けを手伝うから、早く終わらせて寝ちまおう」

そう言いつつ、俺はなんとなしにねりまきの頭を撫で始める。うんうん、頑張つて偉いなあ。

「わ!?わ!…もう、テイラー酔ってるね」

「うん?うん、酔ってるのは間違いないな」

「ダメな大人だー」

そう言いながらもねりまきは楽しそうに笑っている。そうだな、やつぱりねりまきからすれば俺は大人で、俺からすればねりまきはまだまだ子供なんだ。リーンが言うようなもしかしては在り得ない、可能性があるとすれば一人目の女将になるくらい成長した後だろう。

「ん?…こんなことするぐらいテイラーが酔っぱらってて、お父さんももう寝てるし：
リーンさん達も…」

「ねりまき?」

ねりまきは急に考えるような仕草をして小声でブツブツと呟き始めた。俺の声も届いて無いか、少しの間考え込んでいるねりまきを撫でながら待っている。

「…ねえねえテイラー。ちよつとお願いがあんだけど、いいかな?」

ねりまきは俺に撫でられたまま、ずいっと身を寄せながら聞いてきた。胸の前辺りから上目遣いで俺の顔を覗き込んでくるねりまきは、どこか小悪魔的な笑みを浮かべている様に見える。

「お願い?」

「そう、テイラーにしか頼めない大事なお願いなの」

「んー…俺に頼めない事か。ねりまきの頼みなら断る理由は無いが、今からか？」

「だって明日になったら帰っちゃうんでしょ？それに今からじゃないとダメな事なの！だからお願い！」

ねりまきは手と手を合わせて拝むように頼み込んできた。ねりまきがここまでするという事は本当に大事な事なんだろう。なら、俺の答えはただ一つだ。

「わかった。こんな俺で良ければねりまきのお願い、叶えてやろう」

「さっすがテイラー！ありがとうー！」

満面の笑みを浮かべてねりまきは俺に抱きついてきた。そんなに嬉しかったのか？こうなったからには全力で頑張つてあげないとな。

「あー…でも俺結構酔っぱらってるぞ？大丈夫なのか？」

「大丈夫！準備は全部やっておくから！テイラーは来た時につけてた装備とかを着て戦う準備を整えておいて、他の人は寝てるんだからこっそりとね。その後は店の外に出てくれればすぐに私も行くから」

そう言つてねりまきは準備のためか店の奥…多分自分の部屋に小走りで駆けて行つた。ねりまきが大丈夫というなら大丈夫なんだろう、俺も言われた通り準備をするとするか。

10話

外に出て涼しい風に当たっていると…なんでこんなカチガチの装備を着こんでるんだろうという疑問が湧いてきた。んー…ねりまきがそうして欲しいと言っていたからなんだが、これから何をしようというんだ？

「おまたせー！」

酒でふらつく頭を揺らしながら考えていると、声を弾ませてねりまきがやってきた。「おお、待ってたぞ。で？これからどうするんだ？」

ねりまきは昼間の時よりも動きやすそうな（ヒラヒラが少ない）魔法使いらしい格好で、背中にはリュックを背負っていた。手には手持ちの燭台と蠟燭、そして小ぶりの杖を腰につけていた。つまり…これから何かと戦いに行くという事なんだろうか？

「うん、とりあえずは…」

そう言いながらねりまきは俺の手を掴み。

「テレポート！」

一瞬の暗転。うわっ！酔ってる状態だと気持ち悪いなこれ！

「さあ、とりあえず付いてきて」

テレポート酔い？をしている間もなく、ねりまきはそのまま俺の手を引いて先導を始めた。急なテレポートと周りの暗さから何処にいるのか分からなかったが。

「……………」

ねりまき何かを呟くと蠟燭に火が灯り、一本の蠟燭とは思えないほどの光を放ち辺りを照らす。

「…森？」

どうやらねりまきが俺を連れてきた場所はどこかの森の真ん前で、今はその森の中をずんずんと進んでいるようだ。森は普通なら傾斜、木の根、石や岩などで歩きにくいはずなのだが、先頭を歩くねりまきの足取りは軽く、酔っぱらっている俺でも問題なく歩けるほどにならされていた。つまりこの森はそれなりに人の往来があり、地面が踏み固められて居るのだろう。

「ねりまき、この森は何処なんだ？」

「この森は通称「紅魔の森」、経験値稼ぎや素材集めで紅魔族が良く使う里に隣接した森林地帯だよ」

「へえー。戦う準備もしてきたって事は…何か狩る手伝いつて事か？」

「んー…まあそうかな？とりあえずそれなりに奥には行くつもり。途中から道が悪くなるかもしれないから気を付けてね」

「わかった」

なるほどなるほど、そういう手伝いか。こんな夜中にやるなら紅魔族とはいえねりまき一人じゃ危ないって事なんだな。任せとけ、ねりまきの事はクルセイダーとして絶対に守り抜いてやるぞー。――

「――この辺りでいいかな？」

ならされた道から外れてからも歩き続け、流石に酔った状態で進むのがつらくなってきたところでねりまきが足を止めた。そこは森の中でもやや開けた場所で、これなら俺が武器を振ったり立ち回ったりするのに不自由は無さそうだ。

「テイラー、ちよつと下がっててね」

「わかった？」

ねりまきは俺から手を離すと一人で広場の中心辺りまで歩いて行くと地面にしゃがみ込んだ。

「アースシェイカー」

ねりまきがそう唱えると、広場の地面がボコボコと波うち始めた。その波によって石は端へと追いやられ、露出していた木の根は地面へと吸い込まれるように消えていき、それらが収まった時には広場は先ほどのならされた道のようにほぼ平らな動きやすい地形へと変わっていた。

「おお〜！」

思わず感嘆の声が漏れ、パチパチと拍手を鳴らしてしまっていた。ねりまきはそんな俺に向かつてVサインを出しながら。

「これでかなり動きやすくなつたでしょ？ 足場が悪いと近接の人は大変だもんね」

「まったく。定点で戦うならこれほどありがたい事は無いな」

戦いやすい場所に移動するだけじゃ無く、それを魔法で作れてしまうとは流石としか言いようがない。多分これも魔力に余裕がある紅魔族ならではの事だろう、リーンに提案でもしたらキースの二の舞になる事間違いないのだ。

「えーと……そろそろこれ飲んで貰おうかな？ はい、テイラー」

ねりまきは背負っていたリュックを下ろしてそこから一本のポーションを取り出した。そして差し出されたそれを受け取ると、俺は何の疑いもせず飲み干す。ねりまきがかかるものなのだから、きつとこれからの戦いで必要な事なんだろう。

「……………いや、なにやってんだ俺は」

一気に頭がスツキリした。そして一気に血の気が引いた。

「効いた？ やつぱりうちの里特製の酔い覚ましポーションは効果バツグンだね」

「いやー！ いやいやいやー！ どういうことだこれは！ こんな時間に危険な森の中って何を考えてるんだー！」

確か昼間の説明ではこの紅魔の森、出てくるモンスターの平均が一撃熊を始めとする危険モンスターばかりという話じゃ無かったか？

「テイラー！落ちて聞いて聞いて！確かに酔っぱらっている間に連れて来ちゃったのは謝るけど、ちゃんと安全とかも考えた上での行動だから。まずは私の説明を聞いて、それから判断して欲しいの。これは…私の夢を叶えるチャンスなの！」

「……………」

両手を合わせ、頭も下げた態勢で今度は必死にお願いをしてくるねりまき。酔っている間にとりあえず連れてきたという事は、素面の俺ならば間違いないと断られると思つたから、とりあえず連れてきたという事だろう。一応酔っている間の事はしっかりと覚えておる。酔って判断力が低下してはいたが、ねりまきはそう無理を言うような奴じゃない。それに「夢を叶える」や「俺にしか頼めない」というのは本当なんだと思う。こんな危険な場所からはさつさと帰りたいところだが、まずは話を聞いてやるか。

「よし、聞こう。ただし納得がいかなかったらすぐに帰るからな」

「わかつてる、絶対に納得させてみせるからね」

顔を上げたねりまきは不敵な表情を浮かべていた。どうやら俺を納得させられる程の材料はしっかりと用意している様だ。ならばと俺は気持ちを強く持つことにする、ここに来てただ情に流されるような決定はしない。俺の冒険者としての経験から、シビアに

判定を下して上げなければねりまきの為にもならないだろう。

「まず、この蠟燭。これは紅魔族特製の魔道具で、これを灯している限りこの紅魔の森といえども敵は寄つてこないの。実際ここまでの間安全だったでしょ？」

「そうかも知れないと思つてはいたが…普通に凄いな」

紅魔族というのは本当に何気なくとんでもないものを使うなあ…。あの蠟燭だけでも、実際に買うとしたらとんでもない額になるのは間違いない。

「さらに私はテレポートを習得している、というか紅魔族で取つてない人なんてほぼ居ないんだけどね。私の魔力がある限りはすぐに戦闘を離脱して里まで戻れるから、どんな危機的状況になつても大丈夫よ」

「ふむ…だがそれは魔力がある限り、だろう？ 戦闘は全部予想通りには進まない、もしタイミングが悪く魔力が尽きてしまつたらどうするんだ？」

そう、どんなに対策をしたとしても不慮の事態が起こるのがモンスターとの戦闘というものだ。これは冒険者として活動していれば絶対に避けられない事で、俺達のパーティーでも何度か起こっている。そして、もしそれが起こった時に切り抜ける為に必要なものは運と経験だ。実際、俺達は運良くレベル相応のモンスターとの戦闘中で、さまざま機転の利いた行動に移せるほどの経験があつたからこそ切り抜けられたのかも知れない。

「だからこれも用意したの。マナタイト、これがあればすぐに魔力を回復する事が出来るでしょ？学校の授業で作った奴だけど…私の魔力を最大の半分くらいは回復できる魔力が込められてたはずよ。ぷっちゃんも良い出来だつて合格点もくれたし、出し惜しみしなければ二人でレポートする時間と隙は十分に作れるわ」

「本当に用意周到だな。それにしてもマナタイトを授業で作るつて…いや、紅魔族なら今さらか」

「そうだ、あの蠟燭といい紅魔族はそういう「普通の冒険者が喉から手が出る程欲しいアイテム」を作り出す事が出来るんだ。さっきの酔い覚ましのポーシヨンも…多分市場の値段を考えたらいけないような代物なんだろう。それを知らないとはいえ一気飲みか…何気に味にもこだわったのか美味かったな。」

「よし、とりあえず危険を感じたらすぐさま逃げれる準備が出来ている事は分かった。次は何をするかだ」

「なんかしらのモンスターとの戦闘があるのは間違いないとして、一体何を目的としているのか。当然相手に寄っては帰る気満々だ。そもそも紅魔族であるねりまきが俺に手伝いを頼むような相手だ、俺でどれくらい役に立てるといふのだろうか。」

「私の夢、それはね…」

「ねりまきはそこで言葉を区切ると、杖を構え真っ赤に輝く瞳で俺の目を射抜くように

見つめながら。

「あの、子供の頃から憧れていた騎士と魔法使いの冒険譚のように。私を守ってくれる人と一緒に、困難な儀式をやり遂げる事！」

11話

「こつちだ！デコイ！」

広場に入り、まずねりまきに狙いを付けようとした一撃熊の注意を自分に引き付けた。ヘイトをこちらに向けた一撃熊は一転して俺の方へと突進してくる。

「ふんっ！」

その渾身の突進を、俺は両手で構えた盾でガツシリと受け止めた。自身の突進を止められた一撃熊は負けじとさらに押し込んでくるが、俺も負けてはいない。そうして硬直状態を作っていると。

「ファイアランス！」

ねりまきの放った炎の槍が一撃熊の頭部を撃ち抜いた。その一発は的確に急所を狙ったまさにクリティカルな一撃で、それだけで一撃熊を仕留める見事な魔法だった。

「おら……よつとー！」

頭部を撃ち抜かれ動かなくなった一撃熊を、俺は素早く広場の端へと放り投げる。なるべく偏らないようにしているが、それなりに積み上がって来たな。もし手間を惜しんで放置していたら死骸が邪魔になり、動きやすいフィールドというアドバンテージが無

なくなってしまうていただろう。

「オツケー！順調だね！」

ねりまきは嬉しそうにウインクをしながら拳を前に突き出した。俺もそれに倣い、合わせる様に拳を突き出しながら。

「ああ、この調子で油断しないでいこう」

まさかねりまきの作戦がここまで上手くいくとは思わなかったな。恐らくだが、ねりまきはいつか来る日の為にと様々な戦い方や仲間との連携を思い描いていたのだろう。そしてそれは、決してただの夢見がちな妄想なんかではなく、実践を想定した実に有効な戦法だったという事だ。

ねりまきが提案した作戦、それは「一回耐えて」というものだった。正直、俺はこのモンスター相手に歯が立たない。だが全力で防御に徹するならばその限りではないのだ。そこで俺がモンスターの初撃を制し、モンスターが動きを止めている間にねりまきが魔法で攻撃をするという役割分担だ。

「んんん…最高！これが！これこそが私の理想！私の夢！ありがとうテイラー！私は今、猛烈に感動している！」

拳を天に掲げ、気合の入ったポーズを決めるねりまき。そう、ねりまきがやりたかった事とは「俺を相手方にして族長になるための試練に挑戦する」事だった。これはねりま

きが族長になりたいという訳では無く、昼間に聞いたようにそのベースとなった冒険譚に憧れていたからだ。

その試練の詳しい内容はというと「夜中の間、紅魔の森で迫りくるモンスター相手に、アイテムの類を使わずに、朝まで耐久をする事」。最初は紅魔族が狩場にするくらいなら楽勝だと思つてしまつたが、そんなことでは試練とは言えない。実際のところ、狩場として利用する時は目当てのモンスターを上級魔法で倒し、魔力が切れそうになったらテレポートで戻るといふもので。時間すれば一時間も掛からない、実に紅魔族っぽい（ねりまき談）戦い方なんだとか。

それが一晩中戦い続けるとなるとそうはいかない、いくら紅魔族といえども魔力が無限という訳では無いのだ。そこで必要になつてくるのが前衛、または相方の存在で、その頑張りによつて魔法使いの魔力消費をいかに抑えるかがこの試練のカギとなつていく。ちなみに見事その試練を達成したゆんゆんはほぼ一人で試練を乗り越えたのだとか：やはり若くして族長になるだけはある、また一つ見直したぞ：ゆんゆん。

「ねりまき、次が来たぞ」

なんとなくではあるが、俺はシーフの気配察知のような真似ができる。これはスキルを習得したわけではなく、冒険者として経験から自然と身に付いた技術だ。気配がした方とねりまきの間にポジションを変えつつ、追加でモンスターが来ないかにも気を配

る。モンスターはこっちの事情なんて分かつちやくれない、最悪のタイミングで増援が来るかもしれないという心構えをしておくのは大事な事だと思う。

「あのモンスターなら…雷かな」

広場に顔を見せたモンスターの種類から、ねりまきは一番効くであろう属性を決めた。これも大事な事で、魔力を節約しなくてはいけない以上少しでも有利な属性を使い消費を抑えなくてはいけない。ちなみにねりまきは普通の紅魔族なら取らない「魔力操作」というスキルも習得していて、これを上級魔法と併用することで消費魔力も少なくしている。当然込める魔力が少なければ威力も減る訳で、そこで急所良く狙う必要が出てくるという事だ。

「デコイー！」

そして、その急所を狙いやすくするためにモンスターの攻撃と動きを止めるのが俺の役目だ。前衛が狙いやすくしたモンスターに、消費魔力を調整した魔法で、急所をピンポイントで狙って倒す。「一回耐えて」か…中々にいい作戦じゃないか……。

「……あー…くやしーい！」

白み始めた空の下、ねりまきの叫びが森の中響き渡った。ねりまきは地面に寝転がりながら、手足をバタバタを動かして全身でくやしさを表現している。広場は今、魔除けの蠟燭の火で灯されていてモンスターはもう近づいてこない。そう…結果として、俺達

の挑戦は失敗の終わったのだった。

「もうちよつと俺が動いていればなあ…：やつぱり防衛だけしか出来ない前衛だとねりまきの負担が大きすぎる。これは俺の技量不足だな…：すまない」

「テイラーはしつかり役目をこなせてたんだから謝らなくて良いつてば。そもそも適正レベルじゃない所に無理矢理連れて来たんだし…：それでもしつかり捌けてたんだから、むしろ技量以上の事をこなしてたんじゃないの？」

ねりまきが俺の健闘を称えてくれたのは嬉しいが、結局のところ作戦が崩れたのは俺が十分に敵を引き付けられなかったからだろう。それなりの間隔でなら問題ないが、同時に複数来た時の対処がきつかったからだ。その場合、ねりまきは普通に上級魔法を使わざるを得なくて消費がかさみ。最後なんて一撃熊クラスのモンスターが4匹も一気に襲い掛かってきたせいで、一掃のために大量に魔力を消費してしまった。

「私の方こそもうちよつとレベル上げしとかないとダメだったかなあ。お店の手伝いでサボり気味だったんだよね」

今ねりまきは魔力切れで動けなくなっている。めぐみんのせいでアクセルでは見慣れた光景になっているが、リーンが言うには「魔力切れで動けなくなるのはウィザードの恥」なんだとか。けど今回に限っては仕方ないだろう、もう少しで夜明けという一番疲労しているタイミングでラッシュが来てしまったのだから。

「それでも…俺達はやるだけはやった。しかもほとんど怪我も無い状態であの戦いを切り抜けたんだ。最後の攻防においても、無理に作戦を通す事無くすぐに安全策に移ったのを俺は凄یと思ってるぞ」

運の良し悪しはあつたけど、そこは間違いない。ダメだった所だけに囚われてしまつては成長は望めない。

「実際のクエストでもあるんだ、依頼と安全どちらを取るかっていう場面がな。当然安全を取る方が正しいが、場合によっては多少の無理を承知で依頼を優先しなければいけない時もある。その見極めを正確に出来るようになって一人前の冒険者だと俺は思っている」

あの時点でもし成功にこだわっていたら、押し切られて怪我どころじゃ済まなかったかもしれないなかつただろう。

「生き残れたつて事は次があるつて事だ。急に連れて来られたり、縛りがあつたりはしたが…提案した作戦もそれなりに上手く行っていた。俺なんかが言うのもなんだが…ねりまきとのパーティーでの戦闘はとても楽しかつたぞ、また機会があつたら一緒に狩りに行かないか？」

「……………」

俺の言葉に、ねりまきはきよんとした顔で俺を見つめる。しかし次の瞬間、その目

からはぼろぼろと涙が流れ出して。

「ううう…ありがとうテイラー！私も…私もすつごく楽しかった！約束だよ！また一緒に…約束だからね！」

俺は、まだ上手く体が動けないねりまきに歩み寄って静かに腰を下ろした。そして常備しているタオルをねりまきに渡すと、泣き顔を見ないように後ろを振り向く。後ろからはねりまきの嗚咽と…「ズビー！」という鼻をかむ音が聞こえてきた。

12話

「ぷっちんのやつら……」

まだ怒りが収まらないのか、ねりまきは先ほどから「ぷっちん」に対しての恨み言を俺の耳元で発し続けていた。

「あの万年ヒラ教師！ 適当におだてられたからって粗悪品を無駄に褒めちぎって！ ダメなものだ！ 言わないのは教師失格だ！」

「……………」

愚痴を聞いているとねりまきの方にも多少非はある気がするのだが……昼間にそれとも苦言を呈していた気もするし、それなりの問題人物のようである……教師なのに。そんな教師の授業でねりまきが作成したマナタイトだが、どうやら魔力が漏れて効果が無くなってたという事が先ほど判明し。俺は今、荷物その他にねりまきも背負って帰路についていた。

「テイラー……ごめんね。モンスターの処理も、テレポートで帰るのも出来なくなっちゃって……。それに折角用意したマナタイトだったのに……」

一通り不満を吐き出した後、ねりまきは本当に申し訳なさそうに声を絞り出した。

「…ダメだったものは仕方ない。最悪のタイミングで発覚しなかっただけ運が良かったと思う。」

あの時マナタイト頼りで強硬策に出なくて本当に良かった。やはり切り札というのは切らずに済めばそれに越したことは無い、例え持ち腐れと言われようとも、余裕を持つというのは必要な事なのだ。ちなみに、本来ならば倒したモンスターは後で素材を取るために氷魔法で保存する予定だった。狩ってる時の雑談で、その素材を使った料理の話も出ていたのだが…しばらく放置する以上それは望めないのは残念な事だ。

「けどこれも良い教訓になっただろう？ アイテムの管理は念入りにだ。俺も昔な、それで失敗した事があるんだ。用意してたポーシヨンが全部割れちまってな…あの時は本当に死ぬかと思った」

「…テイラーもそういう時があったんだ」

そう、誰にだってそんな失敗はあるもんだ。違いがあるとすれば失敗をしつかりと活かせる事が出来るかどうか。それとそんな失敗を恐れずに挑戦をする…。

「なあ、ちよつと聞きたいんだが…ねりまきは何でそんなに行動力？ いや決断力があるんだ？」

「…ん？ どういうこと？」

俺の言い方が悪かったのだろう、首を傾げているであろうねりまきに。

「ほら、昨日里の案内を申し出てくれただろう？初対面の俺に対して、すぐさまそんな事を提案するなんて中々出来ないぞ。クエストで小さな村に行ったりするとたまにあるんだが…俺は割と子供とかには怖がられるタチなんだ。他所から来た武器をもったデカイ男だからな、顔も割と仏頂面だと自覚している」

「私はそんな子供じゃ無いし。それに案内を申し出たのも、実は外の事とか聞けたりしないかな…って下心もあつたんだよね」

やはりそういう思惑もあつたのか。よくもまあ…そんなにグイグイを行けるもんだ。

「この儀式に連れてきた時だつて、俺が酔つてて誘い出し易かつたのに加えて、邪魔になりそうな人がもう寝てて居なかつたからだろう？」

「えー…ああ、うん。確かにチャンスだ！…っては思った」

ねりまきは若干バツが悪そうに答えた。つまり本当は止められるような事だと分かつた上で、それでも自分の我を通したという事だ。

「俺には…そんな決断力っていうもんが欠けてる気がするんだ。一日一緒に居ただけでねりまきも気づいたかも知れないけど、結局のところ優柔不断なんだよ。だからこそ、俺はねりまきの行動力を羨ましく思つてしまう。仲間にもそんな奴が居てな、変わらないうとダメなんじゃないかって…焦る時もある」

そんな俺の悩みを聞いて、ねりまきは背中であんうんとうなり始めた。しかしそれも

束の間、ねりまきは両手を俺の首に巻いてギリギリまで顔を近づけながら

「テイラーはそれでいいと思う」

と、簡潔に答えを出した。俺がその答えを理解するよりも早く、ねりまきは続ける。

「優柔不断って言うけど、それはテイラーの個性なんだから無理に変える必要なんて無いでしょ。確かに昨日一日で、テイラーがどんな人なのかって大体は分かった気はするけど。私はそれを嫌だなーとか変だなーなんてこれっぽっちも思っていないよ。むしろ慎重に行動が出来る大人なんだなーって好意的に考えてた。むしろ紅魔族っていうのが種族として我慢が効かないタチなんだよね、ノリで生きてるっていうか：チャンスがあつたら強引にでも掴み取りに行きがちというか」

「私も実際そうだしねー」と、ねりまきは苦笑する。

「だからかな、私みたいな考えなしにとつては、テイラーみたいな人が近くに居るのは凄くありがたいんだ。だって本当にダメな時は止めてくれるでしょ？さっき一気にモニターが来た時だって、一掃と蠟燭を灯す指示をしたのはテイラーで、私は『テイラーが指示を出してくれたから』すぐに安全策をとったんだもん。もし私だけだったら、もつと無茶してた」

実際俺は：儀式の成功にこだわって話を聞いてくれるか？という懸念を少しだが抱いていた。けどすぐに行動を起こしたのを見てちゃんと判断が出来ていると感心した

のだが、本当は「俺の判断にすぐに従う」と決めていたから早かったという事だったのか。

「けどなんでもテイラー任せにするってわけじゃないよ、自分のやったことにはちゃんと責任は持つし。多分…:というか絶対、帰ったらお父さんに怒られるし…:」

「そりゃあ…:なあ。でも…:それでも夢を実現したかったんだろ?」

「勿論!」

自信満々に言い切るねりまき。こんなねりまきだからこそ、俺は手伝って上げたくなっただらう。

「テイラーは自分の決めた事にもっと自信を持つて良いと思うよ? 例えそれが突拍子の無い事でも、テイラーが出した答えなら、ちゃんと考えた結果なんだろうし」

ねりまきは俺のプレゼントした首飾りを俺にも見える様に振りながら。

「それでもテイラーが自分を変えたいって言うんだつたら…:私は応援する。さっきのはあくまで私の考えだし、参考にしてくれば嬉しいけど結局決めるのはテイラーなんだから。大丈夫。私も、テイラーの事をよく知ってる仲間の人も、頑張ってるテイラーを応援してるよ」

「…:そうか、それは、本当にありがたいな」

胸のつかえが取れた気分だ。少なくとも、今後「決めた事を本当に決めて良かったの

か」なんて無駄に悩む事は無くなったのかも出来ない。あいつらも…きつとねりまきの言う通りの反応をしてくれるのだろう。根拠は無いけどそう思える、なんだかんだで長い付き合いだからな。

13話

森を出て、サキユバス・ランジエリーを指して歩く。途中出会った人達に「昨日の今日で仲良くなったわねー」みたいなからかわれ、これはダストの二の舞だなど少々後の展開が怖くなった。何故かまんざらもなさそうにしていたねりまきだが、その顔は酒場のドアを開けた瞬間絶望に染まる事となる。

「本当に申し訳ない！うちのバカ娘がとんだご迷惑を！」

昨日よりも激しい拳骨で悶えてるねりまきの横で、親父さんに土下座で謝られる。

「いえいえ、俺も理解した上で承諾した事です。本人もちゃんと反省していると思うので勘弁してください」

予想通りの事とは言え、間近で見える親父さんの雷は中々にハードなものだった。その家の教育方針に口出しはしないが、ねりまきならちゃんと反省はしてるし罰も受けた。助け舟を出しておいてやろう。

「…分かりました。普通ならば許される事では無いですが、テイラーさんに免じて今回だけは不問とします。こら！いつまで寝っ転がってんだ！お前も謝らんか！」

「い、いめんなさん」

なんとか正座の姿勢を取り、ねりまきも土下座の謝罪をする。こういう時つてどの辺りで切り上げるのが難しいんだよな。もう一つ助け舟を出してやりたいが…そうだ。

「じゃあねりまき、早速だが朝風呂と朝食の用意を頼む。徹夜で辛い所だろうけど…未
来の紅魔族一の女将なら完璧にこなしてくれるだろう?」

「はい!かしこまりました!少々お待ちください!」

ねりまきは嬉しそうに返事をする。足早に店の奥に走っていった。

「テイラーさん、甘やかすためになりませんよ」

「ははは。大丈夫、ねりまきならちゃんと分かってくれてますよ」

「…重ねて申し訳ありませんでした。そしてありがとうございます。テイラーさんが
一緒に本当に助かりました」

当然の事だが、相当心配をしていたのだろう。俺の手を両手で握り、祈るように感謝
をする親父さんの目にはわずかにだが涙が見えたような気がした。

「あいつがこんな信頼を寄せるのも珍しい、テイラーさんが良ければ今後も気にか
けてやってくれますか?」

「そうなんですか?まあ…また来る時があれば勿論。この店は食事も酒も旨いですし
ね」

「紅魔族随一の酒場兼宿屋ですからな!今後ともご贔屓に、めいっばいサービスさせて

頂きますよ」

ねりまきが風呂の準備を終わらせるまで、俺は親父さんに昨日の事を説明した。親父さんの言う通り俺は甘いんだろう、追加で怒られそうな所は省いておく。その後風呂と食事を済ませた俺は、起きてきたダスト達と入れ替わりで少し寝る事にした。徹夜で戦うのはそう珍しい事では無いが、流石にいつもとは違い過ぎる。

「はあ……疲れた」

ベッドに横になると、徹夜した分の眠気が一気に襲い掛かってくる。色々考える間もなく、すぐに眠りに落ちていくだろう。

「ねりまきは……ちゃんと休めるかな？」

一応親父さんへの説明の時に、俺の分の仕事が終わったらねりまきを休ませてあげるように頼んでおいた。俺が起きた後……ダスト達と一緒に、また里の案内を……。

14話

「テイラー！五時方向！」

「分かった！デコイ！」

キースの指示した方向に身構えると、間もなく目標のイノシシ型モンスター「ボア」が突進してきた。ボアの突進は同レベル帯においても破格の威力を誇っていて、通常ならば避ける、逸らす、何らかの手段で速度を下げるなどで対策をする。間違っても、真正面から受けてはいけない攻撃だ。

「ふんっ！」

だが、俺はあえてその突進を真正面から受け止めた。これは俺がダクネスと同じ趣味に目覚めたという訳では無く。新しく手に入れた装備がどれほどの効果があるかの実験である。

「おおおお！」

「マジかよ!？」

キースが驚きの声を上げた。それもそのはず、俺はボアの突進を受けきったただけでなく、さらに押し返して態勢を崩したのだから。

「フリーズ・バインド!」

間髪入れずにリーンの氷系魔法がボアの動きを止める。ボアはその素材が中々高く売れるモンスターなので、なるべく傷をつけないで倒すのが望ましい。なので、この魔法はあくまで動きを鈍らせる程度に調整して放たれていて。

「()まで強化されるとはな、マジで良い買い物だったんじやねえか?」

軽口を叩きながら。ダストが剣の一突きでボアにとどめを刺した。

「まったくだ…小手で筋力が上がるから腕力だけかと思っていたら、まさか全身の筋力を向上させる効果があるとはな」

俺は両手に装備した真新しい小手を確かめる様に眺める。軽く腕を動かしたり、手の握る開くなどの動作しても不自由を感じる事は無い。

「あーあ、あたしも買っておけば良かったかなあ」

実はリーンも俺の小手の購入に触発されたのか、杖のマナタイト強化をしようかと悩んではいた。しかしそれなりの値段と日数がかかってしまうため、最終的には止める事にしたのだ。

「ま、俺らには関係の無い話だわな」

「俺もエモノは変える気はねえが…どっちにしても金がねえわ」

ちなみに万年金欠の二人はそんな選択肢も無く、鍛冶屋では「すげーすげー」と騒い

でいただけだった。前日の自分を思い出して勝手にダメージを受けていたのは内緒である。

「よし、次を探しに行こう。この調子なら目標討伐数はすぐだろう」

「からめ手無しでボア退治が出来るなんてテイラー様様ね、あたしも魔法の節約が出来て楽ちゃんよ」

「お、次は1時の方向に反応あり。さっきの要領で頼むぜテイラー先生」

「もうとどめもお前がやってくれよ、攻撃力も上がってんだろ？」

「からかい半分なのはさておき、頼りにしてくれている事は受け取っておこう。ただ…。」

「ならダストの取り分は無しだな。分かっていると思うが、小手の購入で俺の貯金はほぼ無くなった。しばらくの間俺からの借金は不可能だと思っておけよ」

「俺とどめ刺すの大好き！」

「とどめを刺されるのも大好きなんじゃないの？」

「ああん！」

いつもの仲間。いつものクエスト。変わらない俺の冒険者としての生活。だからだろるか、あの紅魔の里での一日が事あるごとに思い出される。次に行くのは…何時になるのだろうか？——

「……お疲れさまでした！こちらが報奨金になります！」
「……ありがとう」

ギルドの受付嬢の元気な声に、ねりまきの事を思い出してしまった。だめだな……紅魔の里から帰ってきてからずっとこれだ。もう一週間も前の事だというのに……数日ばかりのクエストにでも行けばと思っただが、

逆に悪化しているような気さえする。本当に……重症だ。

「待たせた、ボアの状態が良かったからだろう。素材の買取金額に色がついていたぞ」

「いいねえー！紅魔の里の飯も絶品だったけど、やっぱり食いなれたアクセルの飯も最高だよな。カエル食おうぜカエル！あと酒だ！」

「ほんとに美味しかったよね、宿の食堂のもの。でも、あんなの毎日食べてたら感覚が狂っちゃいそう」

「カエルも良いけどボアだろボア、俺達が持ち込んだ新鮮な奴だぜ。これを食わねえ手はねえよな」

三人はあの紅魔の里での事を既に思い出している。当然だ、そうそう行けるような場所じゃ無いんだから俺みたいに囚われ続けている方がおかしいのは理解している。それでも……あの里でねりまきと過ごした一日は、俺にとって素晴らしいものだったんだ。

「あ！すみません！注文…」

「はい！少々お待ちください！」

その声に、考えるよりも先に体が反応した。

「…ねりまき？」

「お久しぶりです皆さん！そしてクエストお疲れさまでした！数日前から短時間の臨時バイトで入った新人のねりまきです！」

「…なんでこんなところに居るんだよ？」

「ゆんゆんに頼んで連れてきて貰って、私もレポート先に登録しました！」

ねりまきは得意げにVサインを作っている。その変わらない元気さに、心臓がドクンと跳ねた。

「ねりまちゃん、お店は大丈夫なの？」

「お父さんにも許可は取ってますし、お店の方も疎かにはしてないですよ」

「バイトってことは観光で来てる訳じゃ無いのか？あっちじゃ案内してもらったし、お返しにアクセルの事色々教えるぜ」

「ありがとうございます。私がアクセルに来た理由は…」

ねりまきは赤く輝いた瞳で俺を見つめながら。

「テイラー！会えないのが寂しくて会いに来ちゃった。ここで働いていれば会える確率

上がるかなって思ったけど大正解だったね！あの一日でテイラーの事が好きになっちゃたから、捕まえに来たよ！」

「…はい？」

突然起こった告白にギルド内は大歓声に包まれた。だが、俺の五感は今…ねりまきにしか向いていなかった。色々な声を掛けられている気がするがまったく耳に入らない。

「…本気か？」

「勿論！」

そうだ…本気に決まっている。流石の行動力に口元のニヤケが止まらない。俺もだ…あれからずっとねりまきに会えなくて寂しかったんだ。

「すぐに答えを出さなくてもいいからさ、いっぱい考えて…」

「いや。俺はもう「決めた事を本当に決めて良かったのか」なんて悩む事はやめたんだ。もう答えは出てたんだよ」

俺はねりまきを抱き寄せ、両手で体を包み込んだ。

「俺もねりまきが好きだ。会えないのは寂しいから毎日顔を見せに来てくれ」

ギルド内はさらに大きな歓声が上がって耳が痛い程になった。そんな中でも、俺の耳はねりまきの声をしっかりと捉え続ける。

「…テイラー大好き。実は昨日ね、カズマに会って、貰った首飾りの文字の意味を教えて

貰ったんだ。カズマはこれを『恋愛成就のお守り』って言ってた。好きな人と結ばれま
すようについていう気持ちが進められたアクセサリーなんだって、やっぱりテイラーが選
んだものに間違いは無かったね」

無意識だったとはいえ、そんなもの引き当てるなんて俺の見る目も中々じゃないか。
さて：この騒ぎをどう納めるか頭が痛い所だが、俺は何も後悔していない。ねりまきと
出会った事で、俺は「良い方」に変わったと思う。俺の選択がこれからも正解であり続
ける事は難しいかもしれないが。少なくとも、俺を選んでくれたねりまきの選択を間違
いにする事だけはしないでだろう。